慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	如是観院近衛家久公年譜稿
Sub Title	
Author	緑川, 明憲(Midorikawa, Akinori)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2020
Jtitle	三田國文 No.65 (2020. 12) ,p.162- 221
JaLC DOI	10.14991/002.20201200-0162
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20201200-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

如是観院　近衛家久公年譜稿

緑川　明憲

〔序言〕

近衛家久（法号は如是観院）は、五摂家筆頭の近衛家第二十二代の当主である。享保中期から元文初年にかけて、中御門・桜町の二朝にわたり関白をつとめ、廷臣としての重責を担った。一方、祖父の近衛基凞より古今伝授を相伝し、歌人としても活躍しているのだが、歌道の事績などについて管見では詳細に知られていないように思われる。本年譜は、その家久の誕生から薨去までと、薨去後の関連事項や影響を年代順に記したものである。

なお、歌人家久と、家久を取り巻く歌壇の様相を理解するための一助として、本稿中には一部、家久に直接関わりがない当時の歌壇の動向をあえて立項している。

〔凡例〕

Ⅰ　近衛家久の年齢は、数えで示した。

Ⅱ　改元のあった年は、それまでの年号は省略し、新たな年号のみを挙げた。

Ⅲ　月日（あるいは月のみ）の明確な事項には冒頭に●を、年のみが明確な事項には冒頭に★を付した。

Ⅳ　各年に続いて、その年の末における家久の官位を示した。

Ⅴ　官位に続いて、その年の末までに相伝している歌学の名称を示した。

Ⅵ　年譜を作成する際に用いた典拠のうち、特に頻出するものは（　）内に略記の形で示した。

（基凞）＝近衛基凞『基凞公記』

（无上）＝品宮常子内親王『无上法院殿御日記』

（家凞）＝近衛家凞『家凞公記』

（家久）＝近衛家久『家久公記』

（雑事日記）＝『近衛家雑事日記』

（繰出）＝『近衛家御用部屋日記繰出』

（系譜）＝『陽明家系譜』

※右の七点の原本は公益財団法人　陽明文庫蔵。ただし、『基凞公記』・『无上法院殿御日記』・『家凞公記』・『家久公記』の四点は、東京大学史料編纂所蔵の謄写本によった。

（家譜）＝『近衛家譜』（東京大学史料編纂所蔵）

（秘鈔）＝『看聞秘鈔』（更衣山西王寺蔵）

（槐記）＝山科道安筆記『槐記』（東坊城家本。明治三十三年）
（頼庸）＝錦小路頼庸『錦小路頼庸朝臣記』（国立公文書館蔵）
（実紀）＝林述齋監修『徳川実紀』（吉川弘文館、昭和四十年）
（京記）＝木村探元『京都日記』（『史料京都見聞録』第一巻。法蔵館、平成三年）
（続史）＝柳原紀光編『続史愚抄』（『国史大系』第十五巻。吉川弘文館、昭和十六年）

Ⅶ　右の資料を引用する際、読解の便宜を図るため、適宜平仮名を漢字に改め、句読点を補い、異体字を通行の字体に改めた箇所などがある。

Ⅷ　年譜中の登場人物に冠した官職名は、原則典拠のままとした（但し、兼官している場合は本官のみを記した）。典拠に官職名が記されていない場合は、『諸家伝』・『地下家伝』・『寛政重修諸家譜』などを参考にし、可能な限り当時の官職を付記するようにつとめた。

Ⅸ　古今伝授相伝歌人として、家久の和歌の学習過程などは本来『家久公御詠草』（公益財団法人　陽明文庫蔵）の情報を反映させるべきであるが、膨大な点数が伝来しており、目下鋭意調査中のため本稿では原則としてこれを含めなかった。他日、この調査結果を改めて年譜に加えた上、さらに別稿を用意する。

〔附記〕

この年譜の作成にあたり、資料などの閲覧及び引用を常に御快諾下さいます、公益財団法人　陽明文庫　文庫長の名和修先生に厚く御礼申し上げます。

貞享四年（一六八七）丁卯　一歳

●五月八日、丑刻、嫡男（第二子）として誕生。父は内大臣の近衛家凞（二十一歳）、母は霊元天皇皇女の女一宮憲子内親王（十九歳）。出産には医師の法印了庵が立ち会った。誕生の報は直ちに仙洞御所へと伝えられ、明正院より女房の加賀が派遣され、「御まんぞくの由」が告げられた。なお、乳母は式部卿（近衛家近習の菊池木工が甥にあたる。慶安三年の生まれで、この時三十八歳）がつとめた。（基凞・无上・雑事日記）

●五月十四日、お七夜。明正院・霊元院・東山天皇よりそれぞれ祝儀を贈られる。また、甲府藩主の参議徳川綱豊より白銀五十枚と二種一荷を、伯母（家凞の姉）で綱豊簾中の凞子より産着三重ねと犬張子一対をそれぞれ贈られる。この日、家凞との相性が良くない旨を「祈祷者」が進言したため、これに従い少納言平松時方の子とされた上で、「敏（とし）君」と命名された。名付け親は前権中納言平松時量。（基凞・无上・秘鈔）

なお、凞子の諱は『基凞公記』によれば宝永六年六月五日、家宣（旧名綱豊）の将軍宣下に関連して叙位が行われた際に基凞より命名されたもので、この当時は「姫君」「江戸

姫君」などと通称されていた。本稿では、家宣生前は「凞子」、家宣薨去後は「天英院」に統一する。

●六月九日、上御霊社へお宮参りに行く。（基凞・无上）

元禄元年（一六八八）戊辰　二歳

●四月十五日、未刻、母の憲子内親王が流産により薨去、享年二十。法号は台岳院香山良薫大姉。清浄華院に葬られる。憲子内親王の薨去後、「去々年以来、於此亭養育之間」（『基凞公記』元禄三年十一月二十四日条）「子たち同道して、右府（家凞）かたへぼたん見に行」（『无上法院殿御日記』元禄九年四月一日条）などと記されるように、家久や姉の姫君は、基凞と常子内親王のもとで養育されたらしい。家凞の住まいは「雖隔居所、同門内」（『基凞公記』元禄十四年三月十二日条）にあった。（基凞・无上・続史）

●四月二十二日、憲子内親王の葬儀が清浄華院で行われる。（无上）

憲子内親王が薨去するまでの体調不良の間、基凞は霊元院に対し「不叶愚慮、無仁慈之御心」、また憲子内親王の外祖父坊城俊広（家久の外曾祖父）に対しては「求世名不思病者事、心中頗似禽獣」と厳しく批判している。（基凞）

元禄二年（一六八九）己巳　三歳

●二月十二日、基凞・常子内親王・家凞・祖岸文舟（園基音の子。常子内親王の叔父）・近衛家家司の寺田無禅・常子内親王乳母の中務卿らが近衛邸の庭の緋寒桜を見物した際に茶菓子と酒を用意して、姉の姫君とともに接待をする。（无上）

●二月二十四日、色直しを行う。（无上）

元禄三年（一六九〇）庚午　四歳

●十月二日、常子内親王・姉の姫君とともに参内し、東山天皇と初めて対面する。（无上）

●十月十九日、常子内親王・姉の姫君とともに「下のやしき」（常子内親王が所有する青蓮院敷地内の屋敷か）へ出掛ける。帰途、青蓮院門跡へ立ち寄り、叔父の尊証親王（常子内親王の弟）と初めて対面する。（无上）

元禄四年（一六九一）辛未　五歳

●一月十二日、戌刻、近衛家家司の寺田無禅が没、享年百前後。後年、無禅の思い出を家凞から尋ねられた際に、家久は「御六ツノ歳ニ死タリ。幽ニ御覚へ」（ママ）あるのみの旨を答えている。（基凞・无上・槐記〈享保十一年七月十六日条〉）

●二月七日、基凞・常子内親王・姉の姫君とともに、家凞のもとで夕食を摂る。（基凞）

●二月二十五日、深曽木を行う。（无上）

●九月二十二日、基凞・姉の姫君とともに夕食を摂る。このころには「有手習、古哥一首書連」、また「於敏君者、『千字文』六七句暗誦」しており、基凞から「一々有器量、自愛々々」と称賛されている。（基凞）

●九月二十三日、明正院より「しほらしきものどの」を拝領する。（无上）

元禄五年（一六九二）壬申　六歳

●一月四日、近衛邸で催された千秋万歳を見物する。（无上）

●二月二日、明正院が「下の御やしき」へ行幸する。その際、初午に関わる土産物を常子内親王を介して拝領する。（无上）

●四月十九日、百合の花を見るため、常子内親王・姉の姫君とともに家凞のもとへ出掛ける。（无上）

●九月二十九日、家凞のもとで口切の振る舞いがあり、基凞・常子内親王・姉の姫君とともに出掛ける。（基凞）

●十二月十四日、着袴の儀を行う。（基凞）

元禄六年（一六九三）癸酉　七歳　従五位上右少将

●十一月三日、敏君の元服と名字（諱）に関して、常子内親王が仙洞御所へ参上し、霊元院と相談する。家凞が元服した際、霊元天皇（当時）が名字を勅撰し、宸筆を拝領した例に倣おうとしたため。その後常子内親王は禁裏へ参内し、名字勅撰と宸筆下賜が勅許された。（基凞・无上）

●十一月四日、陰陽助幸徳井友親が元服の日時について、十一月二十五日甲子の巳刻、または同月二十六日乙丑の巳刻と勘申する。（家凞）

●十一月六日、元服の際の祈祷を依頼する諸寺社を、基凞が決める。（家凞）

●十一月八日、元服に関し、賀茂社・春日社・吉田社・平野社・御霊社・多武峰にはこの月十六日から、興福寺・清水寺・因幡堂・智恵光院・安禅寺にはこの月十二日からそれぞれ祈祷するように家凞が命ずる。（家凞）

●十一月十一日、元服について、兵部大輔富小路貞維・左少将滋野井公澄・右京権大夫萩原兼澄・蔵人頭勧修寺尹隆に式への参加が依頼される。依頼は左兵衛権佐交野時香が回状を出した。（家凞）

●十一月十四日、名字「家久」を東山天皇より勅賜される。基凞がかねて選んでおいた三つの名字の候補の中から、「家久」に勅点が付けられていた（他の候補は「稙房」と「基稙」）。先んじて敏君もこの三つの候補を見ていたが、自身も「家久」を選んでいた。（基凞・无上・家凞・家譜）

●十一月十七日、元服に用いる小童装束や櫛巾などが完成し、形式上の親である右衛門督平松時方より贈られる。同日、申下刻より、基凞のもとで習礼を行う。（家凞）

●十一月二十五日、近衛邸寝殿母屋において元服する。身につけた装束は小葵文浮織直衣、濃色単衣、亀甲文浮線綾の奴袴。卯刻に開式（時刻は陰陽助幸徳井友親が勘申した）。帯剣した右中弁坊城俊清が邸外より冠を持参し、宮内卿石井行豊が受け取る。辰上刻、基凞が着座。冠を兵部大輔富小路貞維、泔坏を左少将滋野井公澄、櫛巾を右京権大夫萩原兼澄がそれぞれ受け持って家久の周辺に置く。続いて蔵人頭勧修寺尹隆が理髪し、基凞が冠を加えた。この間に左少弁中御門宣顕が来邸し、従五位上叙位と禁色・雑袍・昇殿聴許の宣旨を持参する。「事々無異失、諸卿有感心之気、大悦々々」（家凞）。元服には他に権大納言広幡豊忠や権中納言裏松意光らの公卿も参加した。巳刻、亀甲の指貫に着替えて参内する。

（基凞・无上・家凞・家譜・続史）

●十二月一日、右近衛権少将に任ぜられる。（无上・家譜）朝廷に提出した小折紙本文は家凞の筆で、名字のみ家久が自ら書いた。「頗有筆勢、自愛々々」、「きどくにかゝれ、めでたさうれしさ、おとなしく、はや〳〵かやうの事もなる事と、よろこぶ事おろかならず」。（基凞・无上）

元禄七年（一六九四）甲戌　八歳　従四位上右少将

●一月五日、越階して従四位下に叙せられる。この時提出した小折紙に自らが署名した。（基凞・家凞・家譜）

●一月九日、江戸の凞子より、初めて年頭の祝儀を贈られる。家久のほか、基凞・常子内親王・家凞・姉の姫君・曾祖母の瑤林院（基凞の実母）・常子内親王の乳母中務卿にも贈られた。（无上）

●一月十七日、常子内親王に連れられて、姉の姫君とともに御霊社と御所八幡へ参詣する。夕飯前に帰宅。（无上）

●二月三日、明正院より下屋敷行幸の土産として「色々のもてあそびもの」を拝領する。「うれしがり、おろかならず」。（无上）

●二月二十四日、江戸の凞子より「色々もてあそび物、ひいな」を贈られる。（无上）

●二月二十五日、読書始。天神名号の掛け軸を掛けて、基凞より『孝経』を教えられる。その後、北野天満宮へ参詣した。なお、このころ「紅梅」題で詠んだ和歌があり、「頗有器量也。自愛々々。難尽筆頭而已」と基凞から激賞されている。（基凞・无上）

●四月六日、常子内親王・姉の姫君とともに紫竹へ出掛ける。夕方帰宅。（无上）

●四月九日、常子内親王・姉の姫君とともに紫竹へ出掛ける。三時知恩寺宮尊勝女王（後西院の皇女。基凞の猶子）も同道した。（无上）

●四月十日、姉の姫君とともに家凞のもとへ出掛ける。（无上）

●四月二十七日、夕方、家凞のもとで夕食を摂る。基凞・常子内親王・姉の姫君が同席した。同日、明正院より「しほらしきたけのこ」を拝領する。（无上）

●五月六日、東山天皇より匂い袋を拝領する。（无上）

●五月七日、匂い袋拝領の御礼言上のため、基凞・家凞とともに参内する。（无上）

●五月八日、常子内親王のもとで、家久の誕生祝いが催される。（无上）

●五月十日、家凞・姉の姫君とともに、初めて外曾祖父の前権大納言坊城俊広邸へ出掛ける。俊広とその妻藤向に対面し、人形廻しなどが催された。（无上）

●五月十三日、常子内親王・姉の姫君とともに仙洞（霊元院）御所へ参上し、天盃などを賜る。夕方の供御も相伴した。さらに女院（新上西門院鷹司房子）・女二宮（栄子内親王か）・女中衆から「色々しほらしきもの」を贈られる。（基凞・无上）

●閏五月十四日、夜、月を見て和歌を詠ずる。「有器也。自

愛々々」。（基凞）
●六月七日、家凞・曾祖母の瑤林院・姉の姫君とともに、祇園へ出掛ける。（无上）
●六月二十三日、この年二月二十五日から読み始めた『孝経』が読了する。（基凞・无上）
●六月二十五日、基凞より『尚書』を教えられる。祝儀として家凞が晩の料理を用意し、基凞のもとへ届けた。基凞・常子内親王・姉の姫君とともに相伴する。（基凞・无上）
●七月十一日、体調不良が続いたため、医者が宿直を開始する。禁裏や仙洞御所にもこの報が達し、見舞いの人が遣わされた。（无上）
●八月二十七日、家久への「なぐさみ」のため、家凞が人形廻しを催す。稽古も家久のもとで行い、家久自身も体験した。（无上）
●九月二日、明正院より下屋敷行幸の土産として、人形、団栗、猿柿（信濃柿）などを拝領する。（无上）
●九月十六日、人形廻しを催す。基凞・獅子吼院宮堯恕親王・妙法院宮堯延親王・玄々院堯憲・祖岸文舟・妙法院院家の日厳院堯什・同じく金剛院円恕らが招かれる。申刻に終了。（基凞）
●九月十九日、灸をすえる。（无上）
●十月六日、人形廻しを催す。「少将うれしがり、おろかならず」。この日は若い公家衆も多く見物した。（无上）
●十月二十九日、基凞・姉の姫君とともに、亥の子の祝いを行う。（基凞）
●十一月十五日、江戸の凞子より、春の小袖類を贈られる。（无上）
●十二月七日、従四位上に叙せられる。（基凞・家譜）
●十二月九日、叙位の御礼言上のため、家凞とともに参内し、御前にて掛け緒や蝙蝠扇などを拝領する。その後再び参内・参院する。（基凞・无上）

元禄八年（一六九五）乙亥　九歳　従三位左中将

●一月二日、夕食後、基凞・常子内親王・姉の姫君とともに、家凞のもとへ出掛ける。（基凞）
●一月二十五日、常子内親王・姉の姫君とともに紫竹へ出掛け、暮れ前に帰宅。その後、来邸していた一乗院宮真敬親王へ人形廻しを披露する。（无上）
●二月十一日、前権大納言坊城俊広とその妻藤向を招き、人形廻しを披露する。（无上）
●二月十四日、左近衛権中将に転任する。御礼言上には家凞が参内した。（基凞・无上・家譜）
●二月二十五日、「紐直し」を行う。（无上）
●三月四日、江戸の凞子より、左中将昇進の祝儀を贈られる。手紙で権中納言徳川綱豊よりも別に昇進祝いがある旨を伝えられた。（无上）
●三月二十三日、一乗院宮真敬親王へ披露するため、人形廻しの稽古を行う。家凞もこの稽古を見物した。（无上）
●三月二十九日、一乗院宮真敬親王へ人形廻しを披露する。（无上）

●七月十五日、基凞とともに参内する。東山天皇に拝謁し、灯籠見物をして帰宅。千秋万歳を象った灯籠を欲したため、常子内親王が禁裏の長橋に申し入れ、夕方にこの灯籠を拝領する。（无上）
●八月七日、常子内親王・姉の姫君とともに紫竹へ出掛ける。夕食を摂ってから帰宅。（无上）
●八月十四日、常子内親王・姉の姫君とともに御霊社の御旅所へ出掛ける。その後糺の森へ行き、御手洗川で遊ぶ。夕方に帰宅。（无上）
●八月十五日、常子内親王・姉の姫君とともに紫竹へ出掛け、夕食を摂ってから賀茂へ出掛ける。（无上）
●八月二十七日、常子内親王・姉の姫君とともに家凞のもとへ出掛ける。夕食を摂ってから帰宅。（无上）
●九月三日、常子内親王・姉の姫君とともに吉田へ出掛ける。「くはんおん」（神楽岡の新長谷寺か）へ参詣するなど、吉田付近の寺を借りて終日遊んだ。（无上）
●九月二十二日、夜、姉の姫君とともに人形廻しの稽古を見物する。（无上）
●九月二十五日、近衛邸で人形廻しが催され、姉の姫君とともに見物する。他に三時知恩寺宮尊勝女王・玄々院堯憲・祖岸文舟・一乗院宮真敬親王なども見物した。（无上）
●十月十三日、常子内親王・姉の姫君とともに祇園へ出掛け、その足で清水寺へ参詣する。（无上）
●十月二十七日、常子内親王・姉の姫君とともに参内する。（基凞）
●十一月四日、近衛邸で人形廻しが催され、見物する。他に三時知恩寺宮尊勝女王・曾祖母の瑤林院・藤向（坊城俊広室）・祖岸文舟なども見物した。（无上）
●十一月十三日、人形廻しの稽古を見物する。（无上）
●十二月二十三日、越階して従三位に叙せられる。（基凞・家譜）
●十二月二十四日、叙位の御礼言上のため、家凞が東山天皇・霊元院・准三宮松木宗子（旧名お岩御寮人。東山天皇の実母）のもとへ参上する。その後、基凞に伴われて家久も参内したが、天皇は行水中のため家久のみ早退した。（基凞）

元禄九年（一六九六）丙子　十歳　従三位権中納言左中将

●一月五日、年頭の御礼言上のため、参内する。（无上）
●一月二十六日、姉の姫君とともに、家凞のもとへ終日出掛ける。（无上）
●二月六日、近衛邸で人形廻しが催され、見物する。他に三時知恩寺宮尊勝女王・曾祖母の瑤林院・「出入のものども」なども見物した。（无上）
●三月七日、昼、家久が人形廻しを主催し、東本願寺の一如光海に見物させる。（无上）
●四月八日、家凞のもとで終日遊ぶ。（无上）
●六月四日、昼過ぎ、人形廻しの稽古を見物する。（无上）
●六月二十五日、近衛邸で人形廻しが催され、見物する。（无上）
●八月十八日、御霊社の神事を基凞・常子内親王・家凞・一

乗院宮真敬親王たちと見物する。当時旱天が続いていたため、雨乞いとして木遣り踊りも催された。（无上）
●八月二十三日、明正院より「鼠の嫁入り」を象った灯籠を拝領する。（无上）
●十月二十六日、江戸の凞子より、春の小袖を贈られる。（无上）
●十二月二十八日、権中納言に任ぜられる。左中将は元のまま。（无上・家譜）

元禄十年（一六九七）丁丑　十一歳　従三位権大納言

●一月四日、家凞とともに、准三宮松木宗子のもとへ出掛ける。（无上）
●一月二十四日、江戸の凞子より、権中納言昇進の祝儀として白銀五枚と肴一箱を贈られる。また、基凞・家凞・常子内親王へ金子千疋と肴一箱、姉の姫君・曾祖母の瑤林院へ金子五百疋がそれぞれ贈られた。（无上）
●二月一日、甲府藩主の権中納言徳川綱豊より、権中納言昇進の祝儀として白銀五枚と肴二種を贈られる。近衛家の人々にもそれぞれ贈り物があった。（无上）
●二月二十八日、戌刻、近衛邸の付近から出火。常子内親王とともに延焼の様子を見物する。（无上）
●閏二月一日、「中納言殿」（徳川綱豊か）より、硯箱や香炉箱などを贈られる。（无上）
●閏二月四日、徳川綱豊が有栖川宮幸子女王の入内に際して派遣した使者石川織部が乗馬する様子を、基凞・家凞・常子内親王とともに見物する。（无上）
●閏二月十一日、人形廻しを催す。石川織部も見物した。（无上）
●六月二日、家凞が行っている庭普請を、常子内親王などとともに見物し、家凞が持参した昼食を相伴する。家凞は人足に餅を配り、踊りを催すなどして慰労したが、その様子も常子内親王とともに「のぞきみ」た。（无上）
●七月～九月にかけて、常子内親王が体調を崩す。九月十六日に快気祝いが行われ、姉の姫君とともに、近衛家の使用人を主体とした踊りを主催する。（无上）
●九月二十六日、基凞・常子内親王・姉の姫君とともに、家凞のもとで夕食を摂る。食後、基凞らとともに帰宅。（基凞）
●九月三十日、常子内親王・姉の姫君とともに、清水寺へ参詣する。その足で高台寺へ出掛け、紅葉狩りをした。（无上）
●十一月十八日、常子内親王・姉の姫君とともに、永観堂の開帳へ出掛ける。（无上）
●十二月二十六日、権大納言に任ぜられる。（无上・家譜）
●十二月二十七日、権大納言昇進の祝儀が諸方より届く。京都所司代の紀伊守松平信庸よりも祝儀の使者が遣わされた。（无上）

元禄十一年（一六九八）戊寅　十二歳　従三位権大納言

●一月十六日、初めて踏歌節会に参加する。姉の姫君がその様子を見たがったため、常子内親王の計らいで忍びで参内し見物した。（无上）

●一月十七日、江戸の凞子より、権大納言昇進の祝儀として銀子五枚・肴二種・樽一荷を贈られる。基凞・常子内親王・家凞へは樽代千疋と肴一種、姫君・曾祖母の瑤林院へは樽代五百疋を、さらに諸大夫たちや乳母の式部卿など奥方の者へも祝儀が贈られた。（无上）
●一月二十三日、甲府藩主の権中納言徳川綱豊より、権大納言昇進の祝儀として銀子十枚と二種一荷を贈られる。（无上）
●二月九日、基凞が「公家衆年寄分」に振る舞いをする。この時に招かれた「喜大夫」（竹本義太夫か）が「今語る体とは変はり」「古風なる」浄瑠璃を披露し、常子内親王・家凞らとともに聞いた。（无上）
●二月十五日、家凞の庭普請を見物する。この日も踊りなどが催された。（无上）
●三月二十五日、姉の姫君とともに、近衛邸における花（霧島躑躅）見を主催する。（无上）
●四月十四日、茶道具を並べるなど、茶室の体を設えて遊ぶ。（无上）
●五月五日、参内する。（无上）
●五月六日、禁裏より匂い袋などを拝領し、御礼言上のため参内する。基凞・常子内親王・家凞も同様の拝領物があった。（无上）
●九月五日、家凞方で「瞬目大師」など讃岐国善通寺の霊宝が開帳され、常子内親王・姉の姫君とともに見物する。（无上）
●九月三十日、常子内親王・姉の姫君とともに、大仏と三十三間堂へ参詣する。また、玄々院堯憲・祖岸文舟と対面した。（无上）
●十一月十二日、家凞より「舞蹈」（朝賀や即位式などで行われる拝礼の仕方のひとつ）を学び始める。（无上）

元禄十二年（一六九九）己卯　十三歳　正三位権大納言

●一月五日、正三位に叙せられる。（家譜）
●一月八日、新調の束帯が完成し、試着・披露する。「はや〳〵大臣のなりにみえて、成程よくきなし給ひて、めでたさよろこぶ」。（无上）
●一月十二日、お歯黒初めと眉上げを行う。（无上）
●一月二十四日、叙位の御礼言上のため、家凞とともに参内・参院する。（无上）
●二月十七日、常子内親王のもとで、基凞・家凞・姉の姫君・刑部権少輔桜井兼供・おつま（左中将町尻兼量の娘。家凞附の女房）らとともに夕食を摂る。（基凞）
●三月十六日、姉の姫君とともに、花見を催す。客は基凞と常子内親王で、菓子や酒などを振る舞った。（无上）
●三月十九日、常子内親王とともに、知恩院と祇園の桜を見物する。その足で誓願寺へ参詣し、夕刻に帰宅。（无上）
●四月二十二日、常子内親王・家凞・姉の姫君・刑部権少輔桜井兼供とともに、賀茂祭の行列を見物する。（无上）
●五月十五日、常子内親王・姉の姫君とともに今宮社の祭りに出掛ける。紫竹の屋敷に露の五郎兵衛を招き、物真似などの芸も見物した。（无上）

●閏九月十三日、基凞・常子内親王・姉の姫君とともに家凞のもとへ出掛け、夕食を摂る。一乗院宮真敬親王と左中将町尻兼量も同席した。（基凞）

●閏九月二十九日、常子内親王に連れられて、姉の姫君とともに太秦の広隆寺の開帳へ出掛け、その足で嵯峨を遊覧する。大井川畔で弁当を食べ、「小がうの久（ママ）せきの寺」（小督所縁の車琴を所有する常寂光寺、または小督の経塚のある法輪寺か）・「ぎわうの寺」（祇王寺）・「たきぐちの寺」（三宝寺）・野宮神社へ参詣し、その後で「うち沢」（大沢池か）と御室を経て、最後に龍安寺へ参詣した。（无上）

元禄十三年（一七〇〇）庚辰　十四歳　正三位権大納言

●一月二日、家凞とともに参内する。（頼庸）

●一月七日、常子内親王・姉の姫君とともに、家凞のもとへ出掛ける。（无上）

●二月二十七日、家凞が揮毫した稲荷大明神（薩摩国鹿児島郡に鎮座）の鳥居の額の礼の裾分けとして、紗綾一巻を贈られる。（无上）

●三月二日、内大臣九條輔実より、娘の輔姫と尾張藩主の権中納言徳川吉通との婚約を伝えられる。輔姫は初め瑞龍寺門跡へ入寺することになっていたが、一転して家久との婚約が決まる。ところが、九條家は「以外貧乏」で準備がままならない上、輔実が「心底柔弱」なため家久との婚儀は延引され、さらに吉通との婚約へと変更された。（基凞）

●三月十五日、憲子内親王の十三回忌を来月に控え、姉の姫君とともに清浄華院に参詣する。法事が早まったのは、賀茂祭と重なるためであった。（无上）

●七月十七日、鹿児島藩主の左中将島津綱貴の娘亀姫との縁談を、山伏の蓮光院頼英を通じて再々申し出られる。元禄十二年の春頃よりこの動きがあったが、「後水尾院御遺戒」に「不可交武辺」があるため進まなかった。（基凞）

●八月十三日、島津亀姫との婚約が、「不及是非無念之至、難尽筆端」であるとしつつも基凞より許可される。一方で近衛家の「家僕等」は「有喜気」であったという。（基凞）

●十月一日、基凞と家凞が同時期に「肩痛」であったため、代わりに参内・参院する。（基凞）

●十二月二十三日、拝賀（翌年元日の関白家拝礼か）の指南を基凞より受ける。「作法之躰非只者、有可興家器、自愛々々」と激賞された。（基凞）

元禄十四年（一七〇一）辛巳　十五歳　正三位権大納言

●一月一日、基凞が元禄十三年に入手した菅原道真の肖像画を、崇敬すべきようにとの指示を受けて譲られる。（基凞）

　同日、初めて参加した関白家拝礼（時の関白は基凞）の作法について、「進退如成人、諸人感之」と称される。（基凞・続史）

●二月十三日、鹿児島藩主の左中将島津綱貴夫妻より遣わされた使者と対面し、縁組の祝儀として太刀馬代黄金三枚・縮緬・樽・肴などを贈られる。（基凞）

●四月二十五日、奈良の春日大社より『春日権現験記絵巻』

二箱（二十巻）が到来する。基凞・家凞・三位桜井兼供・修理権大夫山井兼仍・興福寺院家の多聞院英算とともに閲覧した。（基凞）

●六月十三日、鹿児島藩主の左中将島津綱貴が来邸し、基凞や家凞とともに対面する。（基凞）

●十二月十七日、このころ連日連歌の稽古に励み、「有器量」とされる。（基凞）

●十二月二十三日、曾祖母の瑤林院の八十賀に際し、和歌二首を詠ずる。出題は基凞、浄書は家凞。「家の軒に花盛りに鶯もあり／家桜千年経ぬべきかげしめて　花鶯も盛りをや思ふ」、「草花色々野に咲きたる／この野辺の秋を誰かは問はざらむ　百草あかぬ花の色々」。この他、近衛家歌壇に参加する公卿たちも和歌を出詠した。（基凞）

★この年、島津亀姫との婚姻に関し、新居とする本殿の作事が始まる。新築のため、近衛邸の西北にあった町人の住居五ヶ所を新たに購入した。（秘鈔）

元禄十五年（一七〇二）壬午　十六歳　正三位権大納言

●一月二十三日、姉の姫君が、権大納言徳大寺公全（二十五歳）と結婚する。（基凞）

●六月十六日、「十六の月見」が行われ、家司などから祝儀を贈られる。狂言も催され、夜半に終わる。この風習について基凞は、「近代之風也、雖不知其出所、上下六才六月十六日見月者也」としている。（基凞）

●七月十七日、曾祖父の近衛尚嗣の五十回忌に際し、追善連歌を基凞とともに詠ずる。基凞の一字名は「悠」、家久の一字名は「聴」。「老すげの慰めのみぞ今日の秋　悠／問ふに朽ちせじ言の葉の色　聴／霧わくる高根に月の影見へて聴」。「有和歌器」とされた。（基凞）

●八月十五日、基凞が主宰する和歌稽古会で和歌二首を詠ずる。春日大社権神主の中東時真・諸大夫の治部少輔今大路孝在・沙弥来仙（近衛家に出入りするも伝未詳）らも参加した。（基凞）

●九月二十一日、この年八月二十六日に薨去した祖母の常子内親王附上臈のおいま（三位綾小路有胤の妹）ほか数名の女房が、家久に仕えるようになる。（基凞）

●十月二日、基凞・家凞とともに、夕食を摂る。常子内親王の忌み明け後初めてで、かつて内親王附女房三人も伺候したため、「頗似旧事」状態だった。（基凞）

●十月八日、家凞のもとで行われた口切の茶事に、基凞・姉の姫君とともに参加する。沢田検校と松嶋勾当が伺候した。（基凞）

●十二月、初めて百首和歌を詠ずる。三日間で行った。（基凞）

元禄十六年（一七〇三）癸未　十七歳　正三位権大納言

●一月十四日、昨年末の百首和歌の功によって、基凞より基凞自筆の天福本『伊勢物語』を贈られる。（基凞）

●一月十六日、踏歌節会の外弁をつとめる。（続史）

●二月三日、妹の常君の宮参りの補佐をつとめる。（基凞）

●二月九日、基凞に和歌詠草を提出し、添削を受ける。（基凞）
●三月一日、参内・参院する。（家凞）
●三月四日、禁裏で能が催され、鑑賞のため参内する。（家凞）
●四月一日、「和歌連歌志」があることにより基凞より硯一面を譲られ、礼として夕食を設ける。この硯は後西院旧蔵のもので、院の在世中に「和歌連歌之時、必令随身」と命ぜられて基凞に勅賜された秘蔵の硯であった。（基凞）
●四月四日、智恵光院住持の恭印へ、金千疋を助力する。恭印は数年来連歌の志が深く、基凞より翌五日に連歌天仁遠波切紙伝授が行われる予定であったが、困窮により祝儀の金千疋と昆布一折が用意できなかったため。（基凞）
●四月十八日、紫竹にある近衛家別業へ出掛け、終日周辺の野辺を逍遙する。（家凞）
●六月六日、曾祖母の瑤林院死去（この年五月十六日）による忌中が明け、参内する。（家凞）
●六月二十一日、有卦入り。家凞・姉の姫君ほか諸方より祝儀を贈られる。（家凞）
●七月一日、午刻、鹿児島藩主の左中将島津綱貴とその次男又八郎が来邸し、書院で家凞とともに対面する。紅の直垂を着した。（秘鈔）

宝永元年（一七〇四）甲申　十八歳　正三位権大納言

●一月一日、参内する。（家凞）
●一月十三日、家凞の左大臣奏慶に随身する。（家凞）
●四月二十五日、基凞のもとで『源氏物語』の校合を行う。また、家凞の申請により、基凞が所持する「唐筆タテ」と「唐大筆」（鹿児島藩士の島津兵庫よりの進物）を基凞より贈られる。（基凞）
●七月四日、晩、家凞が移住した「白観亭」に出掛ける。（基凞）
●十二月二十六日、鹿児島藩士の伊集院主水が来邸する。この年九月十九日に卒した島津綱貴の形見として、「成家刀」一腰（長船成家か。但し代金として三十枚）を贈られる。（秘鈔）

宝永二年（一七〇五）乙酉　十九歳　正三位権大納言

●三月二十七日、島津綱貴の娘亀姫との婚礼がこの年六月に決まる。また、婚礼に際して亀姫が将軍世子となった権大納言徳川家宣（旧名綱豊）簾中の凞子の養女となることも合わせて決まる。（基凞）
●四月二十七日、新たに成った屋敷に引き移る。（基凞）
●五月十日、婚約中の島津亀姫が江戸を出発し、東海道を下る。十四日には駿河国蒲原宿に到着した。（雑事日記）
●五月二十六日、島津亀姫が近江国大津に到着したとの報を受け、家凞が諸大夫の刑部大輔進藤長之を派遣する。（基凞）
●五月二十七日、未刻、島津亀姫が上洛し、近衛邸に入る。（基凞・秘鈔）
●六月十三日、吉日であるとして、島津亀姫と婚礼を挙げ

る。（秘鈔）
●六月十六日、鹿児島藩主の薩摩守島津吉貴の使者として藩士の島津大蔵が布直垂を着して来邸し、金無垢・白鮫皮の柄・梨子地の鞘に獅子の蒔絵と螺鈿細工を施した細太刀（長船長光作）一腰と馬代金一枚・白羽二重五十疋・二荷三種等を贈られる。（秘鈔）
●八月二十日、亀姫方において遊興あり。（基凞）
●九月二十九日、亀姫の懐妊が伝えられる。（基凞）
●十月四日、丑刻、亀姫が没、享年十六。これ以前から既に「所労」であったが、『基凞公記』によれば「労症」とあり、労咳に罹患していたらしい。大徳寺に葬られる。（基凞・雑事日記・西王寺蔵『西王寺過去帳』）

宝永三年（一七〇六）丙戌　二十歳　従二位権大納言左大将／連歌天仁遠波相伝
●一月十六日、踏歌節会の外弁をつとめる。（続史）
●一月二十六日、従二位に叙せられる。（家譜）
●十一月十七日、基凞のもとで当座の和歌稽古会が行われる。参加者は他に蔵人小森頼庸など。題「霰残夢」、「向炉火」、「寄月恋」、「寄滝恋」、「社頭暁」。（頼庸）
●十一月二十五日、左大将を兼任する。（家譜）
●十二月二十七日、巳半刻、近衛邸黒書院において、蔵人小森頼庸と連歌師の法橋猪苗代兼郁とともに基凞より連歌天仁遠波切紙伝授を相伝する。家凞の装束は烏帽子に直衣、頼庸は狩衣、兼郁は袴姿であった。御礼として基凞へ太刀・金馬代・蛙形の瑪瑙の文鎮を贈る。また、頼庸へ祝儀として金三百疋と雉二羽を贈る。（基凞・頼庸）
　同日、鹿児島藩主の薩摩守島津吉貴の娘満姫との婚姻が決まる。（基凞）

宝永四年（一七〇七）丁亥　二十一歳　従二位権大納言左大将／連歌天仁遠波相伝
●一月二十四日、禁中（中御門天皇）和歌御会始への出詠にあたり、詠草の添削を基凞に依頼する。また、提出する懐紙の書き方は家凞に指南を受けた。（基凞）
●一月二十五日、晩、基凞のもとへ出掛け、昨日の和歌御会始の様子を語る。前内大臣中院通茂・前権大納言清水谷実業・参議武者小路実陰が出詠した和歌を聞かされた基凞が激怒、これらの人々は全て「院（霊元院）御結構也」であるとし、家久の和歌が勝れていると述べた。（基凞）
●二月四日、終日、基凞より連歌の伝授を受ける。（基凞）
●二月十日、晩、基凞のもとへ出掛け、和歌について言談する。基凞は家凞と家久について、「抑、左府（家凞）当世能書之由、称之有職委細就眼、左幕（家久）於和歌有其志、有職尤其志不浅。有朝廷補佐器」とそれぞれ激賞した。（基凞）
●九月十八日、「御部屋住、可為不自由」ため、鹿児島藩主の薩摩守島津吉貴より時折金子が献上されることとなる。この日は鹿児島藩京屋敷留守居役の若松十左衛門が来邸し、金子三百両を贈られる。（秘鈔）
●十二月十二日、紫地亀甲紋の指貫を着し、基凞の還暦祝い

に参加する。（雑事日記）
●十二月二十四日、知恩院門跡が依頼した曼荼羅の揮毫御礼として使者広野右衛門らが来邸し、家凞とともに対面する。（雑事日記）

宝永五年（一七〇八）戊子　二十二歳　従二位権大納言左大将東宮大夫／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波相伝

●一月二日、基凞のもとへ出掛け、和歌の試筆を行う。（基凞）
●一月十八日、西本願寺の寂如光常が来邸し、家凞とともに対面する。（雑事日記）
　同日、鹿児島藩主の薩摩守島津吉貴より、年頭の祝儀を贈られる。「品々如例」となり、以前より献上があったことが知られる。（雑事日記）
●一月二十三日、仙洞（霊元院）和歌御会始に不参加。懐紙（題「春竹契久」）のみを提出した。（雑事日記）
●一月二十四日、禁中（東山天皇）和歌御会始に不参加。懐紙（題「松含春色」）のみを提出した。（雑事日記）
●閏一月九日、午後、基凞のもとへ出掛け、基凞自筆の『古今和歌集』を贈られる。また、和歌題を所望し、基凞から「鶯告春」、「霞中月」、「漸待花」、「花留人」、「松間藤」、「寄月恋」、「寄山恋」、「寄鏡恋」、「山舘竹」、「社頭榊」の題を提示される。（基凞）
●閏一月二十五日、当座和歌会を催す。参加者は蔵人錦小路（宝永四年四月二十九日、小森より改称）頼庸ほか。家久詠「雨中梅／風やしる風のさそはぬ梅が香も　こぼれて匂ふ軒の春雨」。（頼庸）
●二月十六日、長宮慶仁親王の立太子に伴い、東宮大夫を兼任する。左大将は元のまま。（家譜）
●三月八日、午下刻、油小路通三条上ル西側にあった両替商伊勢屋市兵衛方から出火する。火は燃え広がり、京の町の大半が罹災した（「宝永の大火」）。この時、今出川の近衛邸から直ちに参内した。
　禁裏が罹災したため、東山天皇・新上西門院鷹司房子（霊元院中宮）・皇太子慶仁親王・東山天皇中宮幸子女王は近衛邸へ遷幸し、仮皇居となる。さらに家久の部屋は、新上西門院仮御所として使用されることになった。（雑事日記）
●三月十一日、家久の部屋の納戸に納められていた道具類を、諸大夫の治部大輔今大路孝在や近習が引き取る。（雑事日記）
●五月十八日、鹿児島藩士の在所弥五大夫が来邸し、参勤交代途中の藩主薩摩守島津吉貴より、料紙箱・琉球青貝の硯箱・薩摩製の焼き物・砂糖漬などを贈られる。（雑事日記）
●五月二十日、明日の和歌天仁遠波伝授を控え、今出川の近衛邸と桜御所にそれぞれ鎮座する鎮守の春日社と、北野天満宮で祈祷を行う。（雑事日記）
●五月二十一日、基凞より和歌天仁遠波伝授を相伝する。（雑事日記）
●六月七日、基凞・猪苗代兼郁とともに連歌を詠ずる。「下露もうるふ六種の茂り哉　兼郁／涼しき家の風絶えぬ庭　悠

／待ちえたる月は軒端に影すみて　聴」。（基凞）

●七月二十五日、伯父（家凞の実弟）の大炊御門信名（貞享元年十月十四日卒）を改葬することとなり、この日より七日間身を慎む。（雑事日記）

●八月二十五日、常子内親王の七回忌にあたり、江戸の凞子が西王寺で法事を行わせる。名代は旗本の早川勝七郎重好（かつて近衛家に仕え、凞子の江戸下向に従う）。この法事に諸大夫の治部大輔今大路孝在とともに参加し、香典として金五百疋を奉納する。（雑事日記）

●八月二十七日、凞子の名代として旗本の早川勝七郎重好が来邸し、太刀馬代銀一枚を贈られる。（雑事日記）

●九月十六日、基凞へ書状を送る。その内容は来春に東山天皇が譲位すること、かつ新造する紫宸殿の賢聖障子の銘の揮毫が家凞に命ぜられたことを知らせるもの。（基凞）

●十月二十四日、基凞のもとより諸大夫の主税助佐竹義方が来邸し、茶を点てる旨を伝えられる。家凞のもとにも同様の知らせがあった。（雑事日記）

●十二月二日、霊元院へ進上する和歌短冊の詠草の添削を基凞に依頼する。（基凞）

宝永六年（一七〇九）己丑　二十三歳　従二位権大納言左大将

／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波相伝

●一月二日、家凞とともに基凞のもとへ出掛け、和歌の試筆を行う。（基凞）

●一月十一日、家凞とともに和歌詠草の添削を基凞に依頼する。「左幕（家久）詠歌、尤有意味」。（基凞）

●一月十七日、この月十三日に行われた仙洞（霊元院）和歌御会始に出詠された和歌の写しを基凞に見せる。題「春花似雪」、出題は参議冷泉為綱。御製「春は来ぬこれもまづ咲く花と見て　えならぬ雪の枝やかざらむ」、前内大臣中院通茂詠「そらだきの梅のにほひをかる雪や　花とみはしの春に咲くらむ」、家久詠「芳野よく見てだに花とまがふ哉　山も霞みて残る白雪」。これに対し基凞は「於御製者不能兎角儀、前内大臣和歌、聊有心人含笑云々、…凡歳既七十九、無益出頭歟。…左幕和歌雖非為指事、勝両首和歌歟」と評した。（基凞）

●三月二十三日、関東より飛脚が到来し、江戸下向の用意料として御台所の凞子より三千五百両を贈られる。（基凞）

●四月十一日、辰刻、権大納言徳川家宣の将軍宣下につき、江戸へ向けて出発する。近衛家より近習十名と侍七名が随行した。また、この時勅使として前権大納言高野保春・同庭田重条、仙洞使として権中納言梅小路共方、東宮使として権中納言鷲尾隆長、女院使として参議滋野井公澄、中宮使として前参議外山光顕、大准后使として宮内卿交野時香が下向し、ほかに右大臣二條綱平・前権中納言高倉永福・兵部少輔土御門泰連・左大史壬生章弘・大外記押小路師英らも下向した。（基凞・雑事日記・家譜・秘鈔・実紀）

　途中、富士山の和歌を二首詠む。「言葉にも絵にも及ばぬ山ぞとは　今日富士のねを見初めても知る」、「時は得つ国おさまりて動きなき　ためしとあふぐ山は富士のね」。（秘鈔）

●四月二十三日、江戸に到着する。宿舎に老中の河内守井上正岑・高家の能登守織田信門が挨拶に参上した。（実紀）
●五月一日、権大納言徳川家宣に将軍宣下が行われる。白木書院中段で家宣と対面し、家宣へ金馬代と晒布三十疋を、御台所の凞子へ匂い袋一種をそれぞれ贈った。（実紀）
　同日、家宣より高家の駿河守横瀬貞頭を介して塩鶴と酒樽を贈られる。宿舎へ届けられた。（実紀）
●五月三日、江戸城大広間で饗応を受ける。能の番組は翁・三番叟・八幡・風流・高砂・田村・東北・紅葉狩・祝言・呉服で、狂言も二番催された。江戸市中の人々の見学も許され、五千百人が集まった。（実紀）
●五月四日、江戸城大広間で徳川家宣と対面し、帰洛の許可を受ける。家久のもとには家宣の使いとして老中の隠岐守大久保忠増・高家の中務大輔戸田氏興が参上し、銀五百枚と綿五百把を贈られる。また、家久に随行した右少将桜井氏敦には時服十が贈られた。さらに御台所の凞子の使者として留守居番の藤堂勝兵衛良明が参上し、時服二十を贈られた。（実紀）
　同日、一連の辞見が全て終わったのち、江戸城西の丸へ出掛けて改めて家宣と対面し、能が催される。番組は氷室・八島・羽衣・望月・是界・橋弁慶・祝言・金札で、狂言二番も催された。羽衣と是界には家宣自ら出演した。饗宴終了後、休息の間で御台所の凞子と対面する。（実紀）
●五月九日、右大臣二條綱平らとともに寛永寺と増上寺へ参詣する。（実紀）
●五月十一日、浜御殿を遊覧する。家久一行のみが出掛けた（勅使などはこの日の朝に帰京、二條綱平は十五日に遊覧した）。高家の豊前守品川伊氏・能登守織田信門の案内で屋敷内を散策、中島の茶亭で茶菓が出され、書院で饗応された。この時、徳川家宣より側用人の出羽守森川俊胤を介して檜重と鮮魚を、御台所の凞子より用人の早川勝七郎重好を介して檜重をそれぞれ贈られる。さらに清水の茶亭でも後段の饗膳があった。この日、浜御殿には老中の相模守土屋政直・伯耆守本多正永、側用人の越前守間部詮房、若年寄の伊豆守永井直敬が詰めた。（実紀）
●五月十二日、江戸城西の丸へ出掛ける。御座所で徳川家宣と対面し、冠棚を贈られる。さらに休息の間で御台所の凞子と対面し、伽羅一木と、内々に重硯・画帖・印籠三十を贈られる。また八十君（基凞と家女房按察（あぜち）との間の女子）へ銀三十枚と縮緬二十巻を贈られる。（実紀）
●五月十三日、家宣より老中の佐渡守小笠原長重・高家の能登守織田信門を介して金五十枚・大紋綸子五十巻・書捨一を、御台所の凞子より女房を通じて硯・文台・香炉・緞子二十巻をそれぞれ贈られる。宿舎へ届けられた。（実紀）
　同日、将軍宣下に対する返礼として、徳川家宣が縮緬五十巻と一種を家久に用意する。返礼品は彦根藩主の掃部頭井伊直通が京へ持参することとなり、この日に託された。（実紀）
●五月十六日、右大臣二條綱平とともに江戸を出発し、帰洛の途につく。（実紀）
●五月二十九日、辰半刻、江戸より帰洛する。（基凞・家譜）

●六月二十一日、東山天皇が仮皇居（今出川の近衛邸の南の方）において皇太子慶仁親王へ譲位する。この時、新たな仮皇居（今出川の近衛邸の北の方）への剣璽渡御に家凞・左大臣九條輔実・右大将九條師孝らとともに供奉する。また、この日をもって東宮大夫を止められる。左大将は元のまま。（家譜・続史）

●七月九日、里村紹巴の奥書を有する牡丹花肖柏撰『源氏物語一葉抄』十冊を基凞が入手し、直ちに贈られる。（基凞）

●八月十日、自邸で詩歌会を催す。（基凞）

●八月十一日、昨晩催した詩歌会の詠草の添削を基凞に依頼する。「於詩者、無錬磨間不及加詞、於和哥者、為其仁間聊加愚意了」。（基凞）

●八月十四日、この月二十三日に行われる新院（東山院）新殿和歌御会始に出詠する詠草の添削を基凞に依頼する。題「寄亀祝」、出題は権中納言飛鳥井雅豊。（基凞・続史）

●九月二十八日、右大将九條師孝・右中弁裏松益光とともに、紫宸殿前に桜と橘を植える。（続史）

同日、基凞のもとへ出掛け、家凞の賢聖障子銘清書の功により、禁裏より剣を拝領することなどを伝える。退出の際、基凞より「委細家門栄耀得時、猶以可被思冥加旨」を教訓された。（基凞）

●九月二十九日、基凞とともに家凞のもとへ出掛け、禁裏より拝領した剣（備州長船住盛景作の惣金作の野太刀）を見る。（基凞）

●十一月十六日、中御門天皇が仮皇居より新たに成った内裏へ遷幸する。この遷幸に歩行で供奉した。（続史）

宝永七年（一七一〇）庚寅　二十四歳　従二位権大納言左大将／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波相伝

●六月十四日、江戸逗留中の基凞に和歌詠草三十首を送り、添削を依頼する。典薬頭錦小路頼庸も同じく基凞へ詠草を送った。（基凞）

●閏八月十九日、島津綱貴の七回忌にあたり、二十両・沈香一包などを鹿児島藩京屋敷留守居役の若松十左衛門へ贈る。（雑事日記）

●十二月二十五日、家凞が太政大臣に任ぜられる。天永三年（一一一二）十二月の先例（鳥羽天皇、当時十歳）に則り、「幼主」（中御門天皇、当時十歳）に代わり霊元院による院宣であった。この院宣を、家凞に代わり家久が院に召されて受けた。（続史）

正徳元年（一七一一）辛卯　二十五歳　従二位内大臣左大将／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波相伝

●一月二十五日、鹿児島藩士の猿渡藤右衛門が来邸し、家凞の太政大臣宣下の祝儀として一荷二種を贈られる。（雑事日記）

●二月二日、江戸逗留中の基凞へ書状を送る。この年一月十三日に行われた仙洞（霊元院）和歌御会始に出詠された和歌も書き写して送った。（基凞）

●二月七日、江戸より御広敷用人の金田半右衛門が来邸し、

御台所の凞子より、家凞の太政大臣宣下の祝儀として内々に金二枚を贈られる。（雑事日記）

●二月二十五日、内大臣に任ぜられる。左大将は元のまま。以後、諸方より祝儀を贈られる。（雑事日記・家譜・続史）

同日、家凞の太政大臣宣下の祝儀として、将軍徳川家宣より内々に祝儀を贈られる。（雑事日記）

●二月二十七日、江戸逗留中の基凞へ、家凞や権大納言徳大寺公全らとともに和歌詠草を送り添削を依頼する。和歌は徳川家宣の五十賀に贈るもの。（基凞）

●三月一日、元赤穂藩士の大石無人（八十五歳）より内大臣任官を祝う書状が届く。（雑事日記）

●六月二日、徳川家宣より、内大臣任官の祝儀として内々に綿二百把・一荷二種を贈られる。家凞・八十君・姉の姫君・妹の常君・三時知恩寺門跡に入寺した乙君・妹の安己君・弟の益君のほか、仕える上臈・諸大夫・乳母の式部卿・家凞乳母の左近などへも祝儀が贈られた。（雑事日記）

●六月二十一日、金沢藩主の参議前田綱紀より、内大臣任官の祝儀として太刀馬代判金（大判）一枚と八講布三十疋を贈られる。金沢藩からの献上は、これが初めてであった。（雑事日記）

●七月十八日、午刻、鹿児島藩主の薩摩守島津吉貴が来邸し、家凞とともに大書院で対面する。その後御座の間へ移り、三汁七菜で饗応する。吉貴より太刀金馬代・一荷両種・羽二重二十疋・琉球桑布二巻・石香盆を贈られる。家凞や妹たちのほか、仕える上臈・諸大夫（進藤長房・同長之・同長冨・今大路孝在）・乳母の式部卿・家凞乳母の左近へも贈り物があった。（雑事日記）

●七月二十八日、婚約中の島津満姫が、満君と改称する。（雑事日記）

●十月四日、卯下刻、亀姫の祥月命日にあたり、大徳寺へ参詣する。（雑事日記）

●十月十九日、長女となる女子が誕生する。母は家女房（おかつか）。幼名は長君。（基凞）

●十月二十三日、内大臣拝賀。参内に扈従した公卿は、権大納言坊城俊清ほか五名、前駈の殿上人は少納言平松時春・権右少弁柳原資堯ほか七名。（続史）

●十一月八日、新任の堺奉行壱岐守浅野長恒が来邸し、小書院で対面する。祝儀として綿三把・箱肴一種を贈る。（雑事日記）

●十一月二十六日、新井勘解由が従五位下筑後守に叙任された祝儀に、金子三百疋を飛脚に託して贈る。（雑事日記）

●十二月十八日、近衛家領加増（この年七月十二日、摂津国河辺郡のうちほぼ千石）の祝いが家凞のもとで行われ、姉の姫君・基凞附女房の按察とともに参加する。典薬頭錦小路頼庸・医師の保生院法印浦野道英も伺候した。終日饗応があり、夜食も用意された。また、近衛家に仕える「惣下部迄不残」振る舞いがあった。（雑事日記）

●十二月二十三日、諸大夫の筑後守進藤長房の七十賀にあたり、自筆の竪詠草と紗綾一反を贈る。（雑事日記）

正徳二年（一七一二）壬辰　二十六歳　正二位内大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波相伝

●一月七日、白馬節会の内弁をつとめる。（続史）

●一月十四日、江戸逗留中の基凞へ試筆の和歌詠草を送り、添削を依頼する。「一段風躰叶余意、可悦々々」。（基凞）

●一月十六日、踏歌節会に参加する。（続史）

●一月十八日、年頭の祝儀として、将軍徳川家宣より内々に黄金三枚・肴一種（代二百疋）・樽代千疋を贈られる。（雑事日記）

●四月二十四日、巳半刻、足かけ三年に及んだ江戸逗留を終え帰洛した基凞を、家凞・権大納言徳大寺公全・姉の姫君・おつま・三位桜井兼供・左中将桜井氏敦・三位山井兼仍たちと出迎える。（基凞）

●五月十六日、上山伝右衛門による『孟子』の講義を受け始める。（雑事日記）

●六月十七日、島津満君の御簾入りの準備が始まる。（雑事日記）

●七月二十五日、家久が和歌灌頂を受けることに関し、基凞と家凞が内々に談合する。（基凞）

●八月十五日、当座和歌会を催す。出題は基凞。題「月迎秋明」、「野分後月」、「月前祝儀」。（頼庸）

●八月二十日、自身の日記『家久公記』の記述が始まる。（家久）

●八月二十九日、基凞のもとへ出掛け、『源氏物語』の「若菜上」を校合する。他に和歌の雑談もした。（家久）

●八月三十日、家凞が所蔵する照高院宮道晃親王自筆の『詠歌大概』を書写する。（家久）

●九月二日、基凞のもとへ出掛け、『源氏物語』の「若菜下」を校合する。（家久）

●九月四日、基凞のもとへ出掛け、『源氏物語』の「若菜下」を校合する。この日で「若菜下」の校合が終わる。（家久）

●九月九日、鹿児島藩士の猿渡藤右衛門が来邸し、内々に対面する。（家久）

●九月十日、家凞のもとへ出掛ける。他に権大納言徳大寺公全・右少将庭田重孝らが同行し、子刻に散会。（家久）

●九月十八日、年始の挨拶として高野山の僧侶が来邸し、対面する。この時期の挨拶は「年々如此」であったという。（家久）

●九月二十一日、家凞のもとへ法橋坂本養伯が参上する。大書院で山水の屏風絵を揮毫するのを見物した。（家久・雑事日記）

坂本養伯は狩野派の絵師。鹿児島の人。狩野養朴常信の門下で、近衛家の御用もつとめた。（『薩藩画人伝備考』）

●十月二日、晩、基凞が来邸する。この日、竹田近江少掾が参上し「カラクリ」を演じたため、ともに見物する。（家久・雑事日記）

●十月四日、巳刻、大徳寺へ参詣する。その足で今宮社周辺を遊覧し、一様庵の貞松尼（もと常子内親王附女房）と対面する。遊覧の際に「山遠しさながらかすむ小春哉」の発句一句を詠じた。（家久）

●十月二十七日、この年十月十四日に薨去した徳川家宣のために『般若心経』一巻を書写し、贈経使となった諸大夫の石見守中川長堅に託す。合わせて大老の掃部頭井伊直該、他の老中や側用人の越前守間部詮房らに書状を送る。（雑事日記）

●十月三十日、伏見宮邸に滞在中の島津満君が、未明に密かに近衛邸の御裏御殿に移る。午前中に鹿児島藩士の島津内記・同藩用人の堀甚左衛門・満君附家老の高橋民部・大目付の鎌田六郎大夫が来邸し、溜之間で吸物や酒を振る舞う。（雑事日記）

●十二月十日、巳刻、京都所司代の紀伊守松平信庸が来邸し、徳川家宣の遺物として狩野松栄直信（文禄元年十月没）筆の一幅を贈られる。（雑事日記）

●十二月十八日、左大将を辞する。直ちに兵仗を下賜される。（家譜・続史）

●十二月二十三日、申下刻、島津満君と結婚する。（基凞・雑事日記）

●十二月二十五日、正二位に叙せられる。（家譜）

正徳三年（一七一三）癸巳　二十七歳　正二位内大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波相伝

●一月一日、柿本人麻呂影前供養の作法を基凞より相伝される。（基凞）

●一月七日、白馬節会に参加する。（続史）

●一月十六日、踏歌節会の内弁をつとめる。（続史）

●二月一日、基凞に所望していた短冊五枚を受領する。この短冊は、満君に仕える鹿児島藩士たちが近日中に帰国する際に持たせることになっていた。（基凞）

●二月十八日、上洛中だった天英院用人の佐渡守早川重好（勝七郎）が辞去するにつき、三汁五菜で饗応する。また、引き出物として白銀十枚と縮緬三巻、さらに内々に元道作の刀（棒鞘、三所物添え）を贈る。（雑事日記）

●四月二十日、基凞が催す連歌会に参加する。参加者は他に典薬頭錦小路頼庸など。（頼庸）

●五月十五日、卯半刻、徳川家継の将軍宣下のため三月九日より江戸へ下向していた家凞が帰洛する。基凞・姉の姫君・三時知恩寺門跡に入寺した乙君・基凞附女房の按察らとともに出迎える。（雑事日記）

●八月十六日、弘御所（仙洞下御所）において霊元院が落飾する。この儀式に参仕するため、諸大夫の治部大輔今大路孝在・修理亮進藤長冨・随身六人・布衣四人・白丁八人・素襖二人を従えて、申刻に近衛邸を出発した。落飾は亥刻に行われた。（雑事日記・続史）

●九月十三日、家凞の催す茶の湯に出席する。客は他に右大将徳大寺公全と姉の姫君夫妻。（『御茶湯之記』）

●十二月四日、天英院より三百両が届く。これは、河原御殿に隠居した家凞が不自由でないようにとの配慮で、「御孝行」の家久に贈られたものであった。（基凞・雑事日記）

正徳四年（一七一四）甲午　二十八歳　正二位内大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波相伝

●一月一日、元日節会に参加する。（続史）
　同日、試筆として和歌一首を詠ずる。「草も木もうるふ恵みの雨晴れて　長閑に霞む春の色哉」。（家久）
●一月七日、白馬節会の内弁をつとめる。（続史）
●一月十一日、仙洞（霊元院）和歌御会始の題「椿寿八千春」が届く。しかし思うところがあり、出詠しない旨を奉行の三位冷泉為久に伝えた。（家久）
●一月二十四日、禁中（中御門天皇）和歌御会始が行われ、薄暮、直衣単の装束で参内する。しかし所労により懐紙のみを権大納言坊城俊清に渡して退出した。題「庭梅久芳」、家久詠「君が代に幾春かけて咲きそはむ　名におふ花と匂ふ梅壺」。（家久）
●一月二十五日、常子内親王の命日を翌日に控え、大徳寺へ参詣する。帰路、基凞のもとへ立ち寄り、「御会之写」を見せ、和歌の雑談をする。（家久）
●一月二十六日、家凞附諸大夫の石見守中川長堅が来邸し、家凞の代参として大徳寺へ参詣した旨を聞く。（家久）
●三月二日、基凞のもとへ出掛け、典薬頭錦小路頼庸とともに「御講尺」を聴聞する。この時に堀川御殿（基凞の住まい）の庭の桜が盛りであったため、即興で和歌を詠ずる。家久詠「誰も見よ千歳経ぬべき家桜　ふりせぬ色を君がかざしと」、基凞返し「幾春のあかぬ色香をとりそへて　わが家桜君に譲らん」、頼庸詠「この殿の若木の桜咲く花の　下にかくるゝ身さへふりせじ」。（家久）
●三月三日、基凞のもとへ出掛ける。「梅花久芳」題で詠んだ家久の和歌「かはらじなあかぬ言葉の花の宿に　匂ふ梅が香代々を経るとも」を記した懐紙を持参したが、これを基凞附女房の按察が所望したため、与えた。（家久）
●四月八日、近衛家領の摂津国伊丹の百姓が窮状を訴えるため三千七百人（二千三百人とも）で出京した旨を、諸大夫の刑部大輔進藤長之と治部大輔今大路孝在から伝えられる。（家久）
●四月二十二日、基凞のもとへ出掛ける。前参議武者小路実陰がこの年五月下旬に和歌灌頂を受けるべき院宣が下ったことを話し、基凞を激怒させた。「末世之躰可歎々々、言語道断々々」。（基凞）
●五月二十一日、午後刻、連歌会を催す。発句は典薬頭錦小路頼庸が詠じた。（家久）
●五月三十日、前参議武者小路実陰が霊元院より古今伝授を相伝する。（続史）
●六月十二日、霊元院が権中納言日野輝光へ古今伝授筥を返却する。元禄初年、秘伝を窺うという巷説が立ったため、霊元院が預かっていた。（続史）
●七月三日、中御門天皇より色紙二枚の揮毫を命ぜられる。奉行は三位阿野公緒・左中将櫛笥隆成・右中将武者小路公野・右少弁柳原資堯がそれぞれつとめた。（雑事日記）
●八月十三日、典薬頭錦小路頼庸とともに基凞のもとへ出掛ける。和歌詠草を持参し、添削を受ける。和歌は基凞が選んだ十の題に基づく。「和歌一段宜歟、猶加吟味」。（基凞）

正徳五年（一七一五）乙未　二十九歳　正二位右大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波相伝

●一月一日、試筆として和歌一首を詠ずる。「咲きて今朝時得たる宿の梅が香を　幾世の春に伝へてを見む」。この和歌を基凞に見せたところ「時を得て咲くてふ梅の色に香に　言の葉添へて幾春も見ん」の返歌を贈られた。（家久）

●一月七日、白馬節会の内弁をつとめる。（続史）

●一月十六日、踏歌節会に参加する。（続史）

●一月二十一日、家凞・姉の姫君が来邸し、ともに夕食を摂る。（家久）

●一月二十五日、権大納言坊城俊清より、この月二十四日に行われた禁中（中御門天皇）和歌御会始の写しを贈られる。（家久）

●二月二日、四月に行われる徳川家康の百回忌に関し、禁裏より『法華経』「寿量品」の書写を命ぜられる。（基凞・家久）

●二月二十五日、巳刻、大徳寺へ参詣する。常子内親王の命日に合わせたものか。次いで一様庵に出掛ける。（家久）

●五月十五日、曾祖母の瑤林院の十三回忌にあたり、西王寺へ香具を寄進する。（雑事日記）

●六月二十五日、中御門天皇より色紙二枚の揮毫を命ぜられる。奉行は三位阿野公緒・左中将櫛笥隆成・右少弁柳原資堯・右中将武者小路公野がそれぞれつとめた。（雑事日記）

●八月四日、七夕の和歌七首の添削を基凞に依頼する。（基凞）

●八月十二日、巳刻に参内し、右大臣に任ぜられる。御礼言上のため、霊元院・承秋門院（東山院中宮幸子女王）・家凞・基凞のもとへそれぞれ出掛ける。（雑事日記・家譜）

●九月一日、家凞のもとへ出掛ける。妹の常君の諱を「尚子」とするにあたり、権中納言滋野井公澄と吟味するように命ぜられる。（家久）

●九月三日、この春に鹿児島藩主の左中将島津吉貴に依頼した琉球人筆の花鳥画二枚が出来したため、薩摩の僧侶権僧正願王院が来邸する。（家久）

●九月十五日、憲子内親王の命日に当たり、清浄華院へ参詣する。帰宅後、『般若心経』を書写した。（家久）

●九月十七日、基凞のもとへ出掛ける。帰宅後、『般若心経』を書写した。（家久）

●十一月二日、右大臣拝賀。参内に扈従した公卿は、権中納言滋野井公澄ほか三名、前駈の殿上人は内蔵頭山科堯言ほか三名。拝賀にあたり、基凞のもとへも挨拶に出掛けた。この時、「イヒクマ」の銘を持つ笛一管と和歌「わが家の風も伝へよ笛竹の　代々のことぶき今日に始めて」一首を基凞より贈られる。家久自身は「非好管絃」であったが、「為子孫」に贈られたものであった。（基凞・雑事日記・続史）

●十一月三日、卯半刻、女子が誕生する。母は満君。幼名は延君（基凞が命名）。（基凞・雑事日記・秘鈔）

●十一月三十日、戌下刻、正室の満君が疱瘡により没。保生院浦野道英・春台院村上宗白（小児科）・加鍋作安（小児科）・林杏安・一橋玄隆（婦人科）・大膳亮安芸貞知（婦人

科）・上田養安（小児科）らの医師が近衛邸に詰めたが、回復は叶わなかった。法号は光相院宝嶽慧勝大姉。大徳寺に葬られる。（基凞・雑事日記・系譜・西王寺蔵『西王寺過去帳』）

満君の死後、和歌を二首詠む。「残りけり我のみ親とみどり子の　乳房のむくひいつか知るべき」、「頼むその仏の教へありてだに　慰め難く忘られもせず」。（秘鈔）

享保元年（一七一六）丙申　三十歳　正二位右大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波相伝

●一月十六日、踏歌節会の内弁をつとめる。（続史）

●閏二月九日、満君の百ヶ日法要にあたり、大徳寺へ参詣する。（雑事日記）

●三月三日、長女の長君が没、享年六。法号は光寿院華嶽玄栄童女。西王寺に葬られる。（系譜・西王寺蔵『西王寺過去帳』）

●三月十七日、基凞のもとへ出掛ける。「于今有愁鬱気、不便々々」とあり、満君や長女を亡くして落ち込む様子が知られる。また、昨年十一月誕生した延君の助力米として六百俵が鹿児島藩より贈られたことを基凞に伝えた。（基凞）

●五月五日、巳刻、参内する。この日江戸よりの飛脚で、徳川家継の容体悪化を知らされる。（雑事日記）

●六月一日、年号勘者の宣下を受ける。奉行は蔵人頭庭田重孝がつとめた。（続史）

●六月二十一日、蔵人頭庭田重孝を通じて国解・年号勘文などを奏上する。（続史）

●六月二十二日、自邸で条事定を行う。権大納言広幡豊忠のほか八名が参仕。さらに改元定を行い、正徳を改め享保とすべきことを決めた。（続史）

●六月二十三日、蔵人頭庭田重孝を通じて条事定文を奏上する。（続史）

●七月二日、自邸に「仗議人々」（年号勘案等に関わった公卿か）を招き、饗応する。（基凞）

●八月二十六日、般舟三昧院で後陽成院の百回忌の法要が行われ、参仕する。（続史）

●九月五日、天英院よりの手紙が届く。この年八月に将軍職を継承した徳川吉宗より、内々に絹二十疋が贈られることを伝える内容であった。なお、基凞と家凞へは綿百把が贈られることになった。（基凞）

●十月五日、鹿児島藩より、延君の合力金として初めて二百両を贈られる。以後、毎年合力米とは別に二百両を贈られることが決定する。（雑事日記）

●十月十二日、妹の常君が十一月十三日に入内することを、書状をもって基凞へ伝える。（基凞）

享保二年（一七一七）丁酉　三十一歳　正二位右大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』相伝

●一月一日、元日節会に参加する。（続史）

同日、小直衣を着して読書始を行う。『御註孝経』と『古

今和歌集』賀の歌に目を通し、次いで試筆を行う。武家伝奏より江戸下向の内意を受けていることを踏まえ、次の二首を詠ずる。「長閑なる光にむかふ東路の　花見むと思ふ春ぞめづらし」、「心とく今年は春を先だてゝ　長閑にもそふ朝霞かな」。次いで文庫において、基凞の代官として柿本人麻呂と菅原道真の影前に焼香する。（家久）

●一月五日、基凞のもとへ急使を派遣し、奈良の興福寺が炎上したことを伝える。（基凞）

●一月十六日、踏歌節会の内弁をつとめる。（続史）

●二月三日、関白九條輔実ら摂関家当主とともに参内し、興福寺焼亡とその再建について奏上する。（続史）

なお、興福寺再建は朝廷より幕府へも依頼されたが、「当時国財とぼしく、貧民救恤の事に明くれ御心を煩はし給ふ折からなり。寺院など再建の事は思ひもよらず」と拒絶された。（実紀〈有徳院殿御実紀附録巻十五〉）

●二月二十七日、女房（薩摩出身。通称など未詳）が懐妊する。（基凞）

●三月二十一日、典薬頭錦小路頼庸が来邸し、吉日たるによって、この月二十三日に基凞より頼庸とともに三部抄を伝授される旨を伝えられる。（頼庸）

●三月二十三日、辰刻、堀川御殿書院で三部抄の切紙伝授が行われ、基凞より典薬頭錦小路頼庸とともに相伝する。この日は薄青の小直衣に紅の単衣、薄色の大紋の指貫を着した。御礼として基凞へ太刀・馬代金十両・紗綾三巻・生肴二種・樽一荷を贈る。また、祝儀として頼庸へ肴を贈る。（基凞・家譜・頼庸）

●四月三日、家久附女房の懐妊に関して、基凞が和歌一首を詠ずる。「願ふ我心地よし田の今日しもぞ　若緑たつ色もめづらし」。（基凞）

●五月二日、今出川の近衛邸大書院で、摂津国にある上ノ太子東福院の宝物が開帳される。（雑事日記）

●五月十九日、典薬頭錦小路頼庸が来邸する。（頼庸）

●六月二十一日、家久附女房が没。堕胎したため体調を損ねたという。法号は竹窓知節信女。近衛家より祠堂料として四宝銀二十枚が西王寺へ寄進された。（基凞・西王寺蔵『西王寺過去帳』・『祠堂料寄附帳』）

●八月二十七日、安禅寺の不空羂索観世音菩薩の荘厳のため、住持の深賢へ金子五両を寄進する。（秘鈔）

●九月十二日、幡枝山へ出掛け、松茸狩りをする。『基凞公記』によれば、家久は「平生遊山等無出行」性格であったが、「為鬱散」に出掛けたのだという。（基凞）

なお、家久の性格について次の逸話も伝わる。「如是観院准后家久公は威厳なる人にて、すべて楽しまるゝ事なし。しかるに、妖怪をこしらへて家人を脅し試み、もし驚く者あれば、大きに笑ひ興とらせしとぞ。この外に慰まるゝ事さらになし。ある時、大きなる竜を紙に貼りて目口を描き、かしらに担がせ、庭の築山の上より歩み行かしめ、茶室に人をつかはして驚かさしめんと謀れけるに、かの竜を担ぎし者、築山の上より池水の深みにはまりて自由なり難く、大方死門に赴きぬ。これよりこの戯れ、止みにけりとぞ」。（柳原紀光『閑

窓自語』中巻第二十九話「如是観院准后家久公戯令作妖恠語」）

●九月十九日、安禅寺の不空羂索観世音菩薩を納める厨子が完成し、白銀二枚を寄進する。（秘鈔）

●十二月二十三日、辰半刻、堀川御殿書院上之間にて、『伊勢物語』と『源氏物語』の伝授が行われ、基熙より典薬頭錦小路頼庸とともに相伝する。この日は狩衣に単衣を着した。御礼として太刀・馬代金二枚・紗綾三巻・干鯛・昆布・樽一荷を基熙へ贈る。祝儀として頼庸へ甘鯛一折を贈る。また、頼庸より雉二羽を贈られる。（基熙・家譜・頼庸）

享保三年（一七一八）戊戌　三十二歳　正二位右大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月一日、試筆として和歌一首を詠ずる。「朝戸あけてまづぞとなふる星のかげ　むかふみどりの空も長閑に」。（家久）

●一月十六日、踏歌節会の内弁をつとめる。（続史）

●二月三日、前権中納言滋野井公澄より禁中（中御門天皇）和歌御会始の写しを贈られる。題「池水長澄」、家久詠「さゝら波さらに今年は月も日も　長閑にぞ見ん春の池水」。但し御会へは出詠せず、基熙の添削のみ受けた。（家久）

●二月十一日、烏丸丸太町の閑院宮邸において、直仁親王の元服式の加冠をつとめる。（続史）

●三月八日、巳刻、基熙のもとへ出掛け、和歌の講釈を受ける。（家久）

●四月十一日、三月八日より断続的に続いた和歌の講釈を終え、夜、古今伝授相伝のための神事が行われる。（家久）

●四月十三日、巳刻、堀川御殿へ出掛け、基熙より古今伝授（和歌灌頂）を相伝する。この日は衣冠と小直衣を着した。御礼として黄金二十枚・羽二重十疋・三荷三種を基熙へ贈る。この時、典薬頭錦小路頼庸も「数十年歌道執心深」（『看聞秘鈔』巻五所収「長之朝臣記録」）いことが認められてともに相伝した。（基熙・家久・家譜・秘鈔）

家久は古今伝授を相伝した一方、入木道の伝授を相伝することはなかった。これについて基熙は、「凡入木之事、可被伝右府（家久）之処、于今無其沙汰。右府雖非能書、可被伝事也」（『基熙公記』享保四年七月二十七日条）と述べている。

●八月五日、江戸において、下向する家久の接待役として徳川吉宗が中村藩主の讃岐守相馬尊胤を任命する。（実紀）

●九月二日、未刻、江戸下向にあたり、暇乞いのため基熙のもとへ出掛ける。基熙より「道中」における「頂礼」や「護身」のために『仁王経』一部を贈られる。（基熙）

●九月三日、徳川吉宗の将軍襲職慶賀のため、江戸へ向けて出発する。梶井宮道仁親王・専修寺門跡円猷（家熙の猶子）・三宝院門跡房演らとともに下向した。（基熙・実紀）

●九月十八日、江戸に到着する。宿舎には老中の和泉守水野忠之・高家の因幡守大友義問が挨拶に参上した。（基熙・実

紀）

●九月二十一日、徳川吉宗と対面し、儀刀・金馬代・縮緬十巻を贈る。（実紀）

同日、吉宗より高家の壱岐守長沢資親を介して一種一荷を贈られる。宿舎へ届けられた。（実紀）

●九月二十二日、江戸城西の丸に出掛け、徳川吉宗と天英院に面会する。（基熙・実紀）

●九月二十三日、江戸城で饗応を受ける。能の番組は翁・三番叟・竹生島・頼政・野宮・春日龍神・祝言・弓八幡で、狂言も二番催された。（実紀）

●九月二十四日、寛永寺と増上寺へ参詣する。（実紀）

●九月二十五日、江戸城で徳川吉宗と対面し、帰洛の許可を受ける。家久のもとには吉宗の使いとして老中の山城守戸田忠真が参上し、銀五百枚と綿五百把を贈られた。また、家久に随行した家司には銀子が贈られた。（実紀）

●九月二十六日、江戸城西の丸に出掛ける。（実紀）

●九月二十八日、徳川吉宗より高家の讃岐守織田信明を介して重硯と塩鮭を贈られる。（実紀）

●十月一日、江戸を出発し、帰洛の途につく。（基熙）

享保四年（一七一九）己亥　三十三歳　正二位右大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月五日、霊元院より仙洞和歌御会始の題「寄巌祝言」が届くも、断る。奉行は参議藤谷為信がつとめた。（雑事日記）

●一月七日、白馬節会の内弁をつとめる。（続史）

●一月二十四日、他の摂家衆を招き、今出川の近衛邸小書院で雑煮と二汁五菜の朝食を振る舞う。（雑事日記）

●三月二十五日、基熙のもとで兼題の月次和歌会が催され、参加する。参加者は他に基熙・典薬頭錦小路頼庸・諸大夫の左馬頭進藤長富。題「風静花盛」、「寄道祝言」。当座でも出題された。（頼庸）

●四月二十四日、月次和歌会を催す。題「夏動物」、「夏人事」。（頼庸）

●五月二十五日、午後、典薬頭錦小路頼庸とともに基熙へ和歌詠草を持参し、添削を受ける。（基熙）

●七月九日、典薬頭錦小路頼庸より中元として雉二羽を贈られる。（頼庸）

●九月三日、中御門天皇より禁中重陽和歌御会の題「菊花映霜」が届くも、断る。奉行は按察使坊城俊清がつとめた。（雑事日記）

●十一月二十四日、中御門天皇の女御で妹の尚子が「御安産所」（「御産殿」）となった今出川の近衛邸へ引っ越す。これに伴い、家久は「北ノ殿」へ移る。（頼庸）

★この年、もと常子内親王附女房の隠岩尼（旧名貞松尼）が住む洛北の薬師山に、満君が使用していた「御化粧間」一宇を寄附する。（秘鈔）

享保五年（一七二〇）庚子　三十四歳　正二位右大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・

古今伝授相伝

●一月一日、子半刻、今出川の近衛邸において皇子が誕生する。幼名は若宮。父は中御門天皇、母は女御尚子で、家久にとっては甥に当たる。出産の際には家凞も来邸した。（基凞・『近衛家取次所日記』・続史）

●一月八日、家凞より二汁七菜の夕食を振る舞われる。また自身に仕える女房七名にも、一汁五菜の料理が家凞より振る舞われた。（『近衛家取次所日記』）

●一月十三日、中御門天皇より鯛を贈られる。（『近衛家取次所日記』）

●一月十六日、踏歌節会の内弁をつとめる。（続史）

●一月十七日、典薬頭錦小路頼庸が来邸する。（頼庸）

●一月二十日、寅刻、女御尚子の体調が勝れず。直ちに婦人科医の大膳亮安芸貞知が呼ばれ、さらに「寄代（ママ）之験者」（『錦小路頼庸朝臣記』）の千寿（手とも）院が呼ばれて加持を始める。酉刻、尚子に准后宣下が行われる。亥下刻、尚子が薨去、享年十九。女院号は新中和門院。（『近衛家取次所日記』・続史）

●一月二十一日、前権大納言櫛笥隆慶が来邸し、家凞も加わって会談する。（『近衛家取次所日記』）

●二月六日、酉刻、尚子、出棺。家久は直接参列せず、諸大夫の兵部大丞今大路孝道を派遣した。（『近衛家取次所日記』）

●二月七日、尚子取次の津田志摩守が出棺直前に発病（中風）したため、「無油断取斗候様にと」医師の岡松良安を派遣する。（『近衛家取次所日記』）

●二月八日、家凞より「窺御機嫌」としてたびたび菓子を贈られる。（『近衛家取次所日記』）

同日、典薬頭錦小路頼庸より土佐麩を贈られる。（頼庸）

●三月二十三日、承秋門院（この年二月十日、疱瘡により薨去、享年四十一）の四十九日の法要が般舟三昧院で行われ、参仕する。（続史）

●三月二十五日、典薬頭錦小路頼庸が来邸する。（頼庸）

●三月二十七日、朝五ツ、尚子の御安産所として使われた殿舎が返還される。（『近衛家取次所日記』）

●七月十四日、晩、娘の延君が没、享年六。法号は凉松院秋月慧光童女。大徳寺に葬られる。密葬で、家久を始め基凞も家凞も触穢とされなかった。（基凞・系譜・西王寺蔵『西王寺過去帳』）

●七月十五日、典薬頭錦小路頼庸が来邸する。（頼庸）

●九月二十四日、申刻、典薬頭錦小路頼庸とともに基凞のもとへ出掛ける。和歌を談じ、秉燭以後に和歌を即詠した。「千鳥／賀茂河や絶えぬ流れの所がら　千世と声する友千鳥かも」、「岡雪／朝戸あけの向かひの岡は埋もれて　松のみ雪にありしまゝなる」。戌刻に散会。（基凞）

●十一月四日、この年一月一日に誕生した儲皇の若宮が「昭（てる）仁（ひと）」と名付けられ（式部権大輔桑原長義が択申）、親王宣下が行われる。この時、上卿をつとめた。（続史）

享保六年（一七二一）辛丑　三十五歳　正二位右大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・

古今伝授相伝

●一月七日、白馬節会の内弁をつとめる。（続史）

●一月二十五日、歌風について基熙より「従去冬、有其風俗一段入骨歟」と称賛される。（基熙）

●二月十五日、中御門天皇より、前権大納言櫛笥隆慶の七十賀にあたり、閑院宮弾正尹直仁親王とともに和歌三十首を短冊に書いて出詠するように命ぜられる。基熙のもとへ出掛けてこのことを伝えると、基熙は「もとよりのあかぬ千歳と七十に　三十そへよと先づ思ふかな」と詠じた。（基熙）

●三月十二日、女子が誕生する。母は家女房。幼名は八世（やよ）君（家熙が命名）。産所は一条に住む諸大夫の因幡守佐竹義方の屋敷が用いられた。（基熙・頼庸）

●四月七日、午後、閑院宮弾正尹直仁親王とともに基熙のもとへ出掛け、『古今和歌集』春部を校合する。典薬頭錦小路頼庸と連歌師の猪苗代兼竹も同席した。（基熙）

●五月四日、典薬頭錦小路頼庸より、梅醤を贈られる。（頼庸）

●閏七月十七日、「凡於和歌事、右府其志不等閑事々微細習練、歓喜不過、是可謂家門繁栄而已」とされ、このころ特に和歌の修練に熱心であった。（基熙）

●閏七月十九日、巳刻、連歌師の猪苗代兼竹とともに基熙のもとへ出掛ける。基熙が傍らに同席して連歌天仁遠波を兼竹へ相伝し、三藐院信尹以来相伝してきた書物二冊を兼竹に見せて書写させた。家久にとっては最初の他者への相伝であった。（基熙）

●十一月二十六日、天英院が昨年以来書写してきた『法華経』が完成する。西王寺へ奉納するにあたり、天英院の希望により家久が外題を揮毫した。この日に供養を行う。（基熙）

●十二月八日、典薬頭錦小路頼庸へ有卦の祝儀を贈る。（頼庸）

●十二月十三日、東山院の十三回忌法要が宮中で行われる。導師は天台座主の梶井宮道仁親王。この時、経衆公卿として参仕した。（続史）

●十二月二十三日、基熙と和歌を唱和する。基熙詠「たぐひなく思ふ心ぞたぐひなき　親の親なる道したふとて」、家久詠「とにかくに親の親なる道をのみ　我が子の子にて千世もしたはん」。（基熙）

★この年、女子が誕生する。母は家女房の小弁。幼名は知君。（実紀）

享保七年（一七二二）壬寅　三十六歳　正二位左大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月七日、白馬節会に参加する。（続史）

●一月二十五日、関白二條綱平より一上を譲られる。（家譜・続史）

●二月三十日、桜の一枝とともに、基熙へ和歌一首を贈る。「嵐山色添ふ花の雲雪も　かゝる桜の一枝に見よ」。（基熙）

●三月二日、享保元年三月三日に亡くなった長女の長君の供養料として、西王寺へ新金五両を寄進する。（西王寺蔵『祠

堂料寄附帳』）

●五月三日、左大臣の宣下を受ける。（家譜・続史）

●五月十二日、左大臣拝賀。権大納言滋野井公澄ほか六名の公卿が扈従し、前駈を左中将桜井氏敦ほか十名がつとめた。（続史）

●五月十三日、基凞より左大臣任官の祝儀として和歌一首を贈られる。「かくばかり世の人ごとに知らせばや　今日の嬉しき老の心を」、返し「かくばかり世の人ごとに知らせばや　今日の嬉しき殿の光を」。（基凞・家久）

●七月二十三日、巳刻、基凞のもとへ出掛ける。先日、堀川御殿の庭に六尺余の蛇が出没したが、基凞が「念誦」と唱えると蛇は動かなくなり直ちに除去できたので、この念誦を書付にして贈られていた。この念誦には口伝も付属しており、この日、基凞より指南される。（基凞）

●十月三日、この年九月十四日に薨去した基凞の法事料として、家凞と合わせて金五十両を西王寺へ寄進する。（西王寺蔵『応円満院様御中陰法事』）

享保八年（一七二三）癸卯　三十七歳　従一位左大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月一日、直廬（北御所）において、儲皇昭仁親王への親族拝を行う。（続史）

●一月十五日、東寺・宝泉院・多武峰総代玉泉院・堺大寺の僧侶が来邸し、対面する。（雑事日記）

●一月十六日、踏歌節会の内弁をつとめる。（続史）

●一月二十八日、従一位に叙せられる。（家譜）

●四月十一日、鹿児島藩より米百石を贈られる。このうち五十石は芳林院（基凞附女房。旧称侍従）へ、五十石は近衛家の蔵に納められた。（雑事日記）

●五月三日、当座十首和歌会を催す。参加者は典薬頭錦小路頼庸・連歌師の猪苗代兼竹・頼庸の養子錦小路鵲丸・左馬頭進藤長冨。（雑事日記）

●五月二十七日、巳刻、禁中（中御門天皇）月次当座和歌御会参加のため参内する。禁中当座和歌御会の参加はこれが初。申刻に帰宅。また、当座和歌御会初参の祝儀として、霊元院より鱸二匹を贈られる。（雑事日記）

●五月二十八日、前日、禁中当座和歌御会に初めて参加した御礼として、中御門天皇と霊元院へ肴一種をそれぞれ贈る。使者は諸大夫の兵部少輔今大路孝道がつとめた。（雑事日記）

●六月七日、当座和歌会を催す。参加者は典薬頭錦小路頼庸・錦小路鵲丸・猪苗代兼竹・左馬頭進藤長冨ら。（雑事日記）

●六月二十二日、当座和歌会を催す。参加者は典薬頭錦小路頼庸・錦小路鵲丸・猪苗代兼竹・左馬頭進藤長冨ら。（雑事日記）

●六月二十二日、当座和歌会を催す。参加者は不明。（雑事日記）

●六月二十五日、佐土原藩主の淡路守島津惟久より、病身につき隠居し但馬守忠雅へ家督を譲った旨と、今後惟久よりの

付け届けが無くなる旨を口上書をもって伝えられる。（雑事日記）

●六月二十九日、弘前藩より基凞への昨年分の合力金百五十両を贈られる。（雑事日記）

●七月九日、鹿児島藩京屋敷留守居役の向井四郎右衛門が来邸し、合力金として金百五十両を贈られる。（雑事日記）

●九月七日、弘前藩主の土佐守津軽信寿より、金五百疋と干鯛一箱を贈られる。（雑事日記）

●十月十日、この年佐土原藩を相続した但馬守島津忠雅より、祝儀として太刀馬代と一種を贈られる。（雑事日記）

●十一月六日、金沢藩主の加賀守前田吉徳より、藩を相続した際に近衛家から贈った祝儀の返礼として、太刀馬代金一枚・二種・樽台五百疋を、また前藩主の参議前田綱紀より太刀馬代金一枚をそれぞれ贈られる。（雑事日記）

●十二月二十九日、弘前藩より合力金として金百五十両を贈られる。（雑事日記）

享保九年（一七二四）甲辰　三十八歳　従一位左大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月一日、元日節会の内弁をつとめる。（続史）

●二月九日、鹿児島藩より合力米として、二百石のうち七十石余が納められる。（雑事日記）

●七月五日、鹿児島藩京屋敷留守居役の向井四郎右衛門が来邸し、合力金として金百五十両を贈られる。（雑事日記）

●九月二日、青蓮院宮尊祐親王より、慈円の五百回忌につき、和歌の出詠を依頼される。（雑事日記）

●十一月三日、薩摩の刀鍛冶宮原正清と玉置安代に命じて打たせた太刀二腰が完成し、和歌二首を詠ずる。「薩摩少将より正清、安代が作りたる太刀をを〳〵一腰、所望にまかせて送り給ふ。喜びにたえず／手にとりて見るに氷のそれとこそ　思ひつるぎの光なりけれ／二つなき二つの太刀はわが家の　千代に千代そへ伝へ伝へん」。（秘鈔）

●十一月六日、巳刻、月次和歌御会参加のため参内する。（雑事日記）

●十二月十一日、諸大夫の左馬頭進藤長冨の屋敷において当座和歌会を催す。題「寄山祝」。この時に書写した自筆の和歌懐紙「さかへよや氏もかはらぬ君と臣と　おなじ三笠の山をあふぎて」は、そのまま長冨へ贈った。（雑事日記・秘鈔〈巻四〉）

●十二月二十四日、弘前藩より合力金として金百五十両を贈られる。（雑事日記）

享保十年（一七二五）乙巳　三十九歳　従一位左大臣／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月一日、元日節会の内弁をつとめる。（続史）

●一月四日、家凞への年賀の使者として、諸大夫の治部大輔今大路孝在を派遣する。（槐記）

●一月五日、家凞のもとへ出掛ける。権大納言鷹司房凞・医

師の山科道安も同席した。（槐記）
　同日、近衛家領の宇治郡岡屋村・久世郡枇杷庄村・紀伊郡吉祥院村・愛宕郡幡枝村より年頭の礼を受ける。（雑事日記）
●一月六日、近衛家領の摂津国伊丹の宿老が来邸し、年頭の礼を受ける。（雑事日記）
●一月二十四日、禁中（中御門天皇）和歌御会始参加のため参内する。題「禁中佳趣」、出題は権中納言冷泉為久、読師は権大納言阿野公緒、講師は蔵人頭櫛笥隆兼、講頌は左兵衛督持明院基雄、奉行は左衛門督油小路隆典がそれぞれつとめた。家久が和歌懐紙を持参した際、急遽御製の読師をつとめるべき勅命が下り（その他の読師は公緒がつとめた）、その後任を果たすと、御製の和歌懐紙（「詠禁中佳趣／和哥／節にあふもゝの／つかさのにぎはひも先／春しるきこゝのへ／のには」）を拝領した。（雑事日記・秘鈔・続史）
●一月二十五日、昨日拝領した御製懐紙の御礼として使者を派遣し、肴一種を献上する。（秘鈔）
　この宸筆御製懐紙は表装され、現在も公益財団法人　陽明文庫に伝来する。重要美術品。
●二月八日、当座和歌御会始参加のため参内する。（雑事日記）
●三月二日、宝鏡寺門跡より、花屋理春禅尼の百五十回忌にあたり、赤飯一蓋を贈られる。理春尼は近衛尚通の娘。（雑事日記）
●三月二十四日、月次和歌会の懐紙を書き、家凞に見せる。（雑事日記）
●三月二十八日、京都所司代の佐渡守牧野英成が初めて来邸し、大書院で対面する。英成の所司代着任は享保九年十二月十五日。（雑事日記）
●四月三日、摂津国大坂住人の高嶋屋浅井源三郎が近衛家への出入りを認められ来邸し、奉書紙二束と扇子五本を贈られる。（雑事日記）
●四月二十二日、和泉国堺住人の酒造業中倉源六が近衛家への出入りを認められ来邸し、奉書紙二束と扇子三本を贈られる。（雑事日記）
●五月九日、巳刻、当座和歌御会参加のため参内する。（雑事日記）
●六月十四日、中御門天皇より月次和歌御会と法楽和歌御会の題がそれぞれ届けられる。（雑事日記）
●八月三日、当座和歌会を催す。参加者は右京権大夫錦小路頼庸・蔵人錦小路尚秀・諸大夫の左馬頭進藤長富ほか。（雑事日記）
●十月十八日、霊元院が修学院離宮へ行幸し、詩歌御会を催す。題「山皆紅葉」。家久はこの行幸に供奉しなかった。（続史）
●十月二十一日、家凞のもとへ出掛け、この月十八日に催された修学院離宮における詩歌御会の題「山皆紅葉」について、三條西実隆詠の和歌「もみぢ葉にたち隠されて見し花の
　かたはらなりし常盤木もなし」を引き合いに出して批評する。（槐記）
●十一月十日、家凞のもとへ出掛け、居合わせた山科道安へ

小袖・大紋の緞子・裏綿の白地羽二重を贈る。（槐記）
●十二月八日、月次寄合を諸大夫全員を呼んで催す。家凞の落飾願い、諸大夫の刑部大輔進藤長之の隠居とその子左馬頭長冨の家督相続などを話し合った。（雑事日記）
●十二月十四日、中御門天皇より月次和歌御会の題が届き、二十四日までに出詠するように伝えられる。奉行は左中将飛鳥井雅香がつとめた。（雑事日記）
●十二月十八日、家凞の准后宣下に関して参内する。（雑事日記）
●十二月二十一日、家凞の准三宮宣下の奏慶に扈従する。（続史）
●十二月二十五日、家凞が突然落飾する。周りに全く知らせておらず、「女中何心ナク持参リ。御姿ヲ見テ駭キ奉ル」有様で、家久もまた諸大夫の兵部少輔今大路孝道よりの急報で知ったが、「努々知ロシ召サヌ」状態だった。（槐記）

享保十一年（一七二六）丙午　四十歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月一日、元日節会の内弁をつとめる。（続史）
●一月十四日、酉刻、仙洞（霊元院）和歌御会始参加のため参院する。子刻に帰宅。（雑事日記）
●一月二十四日、禁中（中御門天皇）和歌御会始参加のため参内する。諸大夫の左馬頭進藤長冨が供奉した。（雑事日記）
●二月十九日、禁中（中御門天皇）当座和歌御会参加のため参内する。申半刻に帰宅。（雑事日記）
●三月八日、今出川の近衛邸で家凞の六十賀が催される。明六ツ半に家凞が来邸し、五ツ半より能が開演した。家凞へは「御服」一具と桃の作り枝を添えた水晶の数珠を贈る。また「三千年の春のかざしと咲くころも　今朝おりにあふ桃の一枝」の一首を詠じた。（家久・槐記）
●六月一日、関白・氏長者・内覧・牛車・兵仗等の宣下を受ける。上卿を権大納言花山院常雅、奉行を蔵人頭坊城俊将がそれぞれつとめた。（家譜・『公卿補任』・続史）
　同日、奏慶。九ツ前に出門し、八ツ半に帰宅。扈従した公卿は権中納言裏松益光ほか六名、殿上人は蔵人頭櫛笥隆兼ほか七名、前駈をつとめたのは右中将滋野井実全ほか十一名。この様子を医師の山科道安は「其御美々タルコト、心モ言モ及ブ事ナク」と述べている。（槐記・続史）
●六月二日、直衣始。轅で参内・参院する。その後家凞のもとへ出掛け、対談する。（槐記・続史）
　『槐記』によれば、直衣始とは「内々」の服である直衣を吉日を選んで着し、出初める儀式のこと。家凞が摂政関白在任中に初めて行ってから（再興の意か）例になったという。また、直衣始の引き出物として「親王ノ御方」（閑院宮弾正尹直仁親王か）より新作の「琵琶」を贈られ、「少納言殿」（西洞院範篤か）が持参した。（槐記）
　同日、一上を右大臣二條吉忠に譲る。（家譜・続史・『公卿補任』）
●六月十四日、霊元院より嘉祥米を贈られる。（雑事日記）

●六月二十一日、少納言西洞院範篤が来邸し、持参した和歌詠草を添削する。（家久）
●六月二十二日、聖廟法楽和歌御会に出詠するため、和歌詠草を霊元院へ提出し、勅点を受ける。披露したのは前権中納言桑原長義。家久のもとへ返却された後、御礼言上のため諸大夫の治部大輔今大路孝在を派遣した。（雑事日記）
●六月二十三日、左兵衛権佐交野惟粛（これすみ）と少納言長谷範昌らが来邸し、持参した和歌詠草を添削する。（家久）
●六月二十五日、聖廟法楽和歌御会に出詠する。題「桃」、「君が代の千年を三度重ねつゝ　花盛り見ん桃園の春」。（家久・雑事日記）
●六月二十六日、辰上刻、清浄華院と大徳寺へ参詣する。「世務繁多」のため、墓参が「延引」したという。（家久）
●七月十二日、禁中（中御門天皇）月次和歌御会の題が届き、この月二十四日までに出詠するように伝えられる。奉行は権中納言油小路隆典がつとめた。（雑事日記）
●七月十六日、右大将鷹司房凞・三時知恩寺門跡尊融尼とともに家凞のもとへ出掛け、東山の五山の送り火を見る。（槐記）
●七月二十一日、所労のため、禁中（中御門天皇）月次和歌御会に欠席する旨を伝える。（雑事日記）
●八月十二日、禁中（中御門天皇）月次和歌御会の題が届き、この月二十四日までに出詠するように伝えられる。奉行は権中納言日野資時がつとめた。（雑事日記）
●八月十五日、当座和歌会を催す。参加者は蔵人錦小路尚秀・諸大夫の左馬頭進藤長冨ら。（雑事日記）
●八月二十三日、巳半刻、禁中（中御門天皇）当座和歌御会参加のため参内する。天皇の命により「如例」巻頭歌を詠ずる。題「残暑」、「夏衣袂かろしとこの秋は　思はぬばかり暑さ残りて」。出題は左中将飛鳥井雅香。（家久）
●八月二十九日、右大将鷹司房凞・前権中納言石井行康が来邸し、大師流能書の甲斐守藤木司直が下北面に加えられることを伝えられ、憤る。司直の性格が「好色人」であり、また推挙した林丘寺宮元秀女王（霊元院の皇女）も「世上有沙汰人」であったため。（家久）
●九月三日、武家伝奏（この時の武家伝奏は前権大納言中院通躬・同中山兼親）が来邸し、甲斐守藤木司直が下北面に加えられ、その後書博士に任ぜられることを伝えられる。これらは霊元院の「御内慮」であったため、了承するも「一向閉口而耳」であった。（家久）
　同日、月次和歌御会の題が届く。奉行は左中将飛鳥井雅香がつとめた。（雑事日記）
●九月四日、蔵人頭坊城俊将が来邸し、甲斐守藤木司直が下北面に補せられ、正六位上に叙せられたことを伝えられる。（雑事日記）
●九月七日、少納言西洞院範篤・左兵衛権佐交野惟粛らが来邸し、持参した重陽の和歌詠草を添削する。（家久）
●九月八日、少納言長谷範昌・同西洞院範篤・左兵衛権佐交野惟粛らが来邸する。範昌は詠草を、範篤と惟粛は懐紙をそれぞれ持参したため、添削する。（家久）

●九月九日、禁中（中御門天皇）重陽和歌御会に出詠する。奉行は左中将飛鳥井雅香がつとめた。和歌は懐紙に書写して提出した。題「新菊有余芳」、「今日咲くはひと花ながら幾もとに　匂ふばかりの秋の菊哉」。（家久）
●九月十三日、当座和歌会を催す。（雑事日記）
●九月十四日、巳刻、前権中納言石井行康が来邸し、談合する。その後、基熙の祥月命日につき大徳寺へ参詣する。（家久）
●九月十五日、左大臣を辞する。（家譜・続史）
●九月、方丈と屋根の修復料として、西王寺へ新金十両を寄進する。（西王寺蔵『祠堂料寄附帳』）
●十月十四日、青蓮院宮尊証親王の三十三回忌にあたり、青蓮院門跡へ菓子を贈る。（雑事日記）
●十一月四日、一乗院宮尊昭親王が来邸し、もたらされた興福寺蔵の仏像（長持四棹分）を大書院で見る。この時白銀五枚を奉納した。また、仏像持参を宰領した同寺僧の正智院・中蔵院と一乗院宮諸大夫の上総介中沼秀延に料理を振る舞う。
　近衛邸にもたらされたのは、運慶作の釈迦如来像・薬師如来像・地蔵菩薩像・観世音菩薩像・文殊菩薩像（以上は春日社の本地仏）、康弁作の天灯鬼・竜灯鬼、空海作の狛犬。（雑事日記）
●十一月十六日、権大納言園基香が来邸し、右京権大夫錦小路頼庸より提出された「願書」について談合する。（雑事日記）
●十一月二十四日、中御門天皇より「八景」の外題の揮毫を命ぜられる。（雑事日記）
●十一月二十九日、蔵人頭櫛笥隆兼が来邸し、「親王御名字書付」を持参する。（雑事日記）
　この日の前日に霊元院皇子の明宮が親王宣下を受けており（＝有栖川宮職仁親王）、明宮に関わる書付か。
●十二月十五日、巳刻、右大将鷹司房熙が来邸し、談合する。その後午上刻に参内し、諷誦願文を内覧する。願文は霊元院より入木道伝授を受けた一乗院宮尊昭親王の筆だったが、故実に叶っておらず、その様は「頗不甘心」であった。家久はこの原因について、後西院が霊元院に対し若年の頃より「不被仰子細」ためであろうとし、和歌についてもまた同じである、と述べている。（家久）
●十二月十八日、家熙が来邸する。年忘れの祝儀を贈り、料理を振る舞う。（雑事日記）
●十二月二十一日、近衛家領の摂津国伊丹の惣宿老が来邸し、伊丹酒大樽を贈られる。また同所の瀬堀兵五郎より鶏卵五十個入り一箱を贈られる。（雑事日記）
●十二月二十八日、「隆真」（民部卿油小路隆真か）の上書がある書状が、禁中より届く。（雑事日記）
★この年、『家久公記』の記述が終わる。（家久）

享保十二年（一七二七）丁未　四十一歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月一日、関白家拝礼・法皇拝礼・儲皇昭仁親王の親族拝・小朝拝参加のため、参内・参院する。（続史）
同日、家凞が来邸する。（槐記）
●一月五日、右大将鷹司房凞・三時知恩寺門跡尊融尼・芳林院らとともに、家凞のもとへ出掛ける。（槐記）
同日、仙洞（霊元院）和歌御会始の題「逐年花跡留」が届く。（雑事日記）
●一月八日、法輪寺・平等院・法隆寺・住本寺・来迎寺・岡屋の西方寺・当麻寺の総代が来邸し、面会の上口祝を与える。また、平等院の塔頭寺院（詳細不詳）・伊丹の法厳寺・浜岡道泉へ、近衛家への出入りを許可する。（雑事日記）
●一月十四日、禁中（中御門天皇）和歌御会始の題「池岸有松鶴」が届く。奉行は権中納言日野資時がつとめた。（雑事日記）
●閏一月二十二日、左兵衛権佐交野惟粛が来邸し、持参した和歌詠草を添削する。（雑事日記）
●二月八日、終日、当座和歌会を催す。参加者は右京権大夫錦小路頼庸・極薗錦小路尚秀・諸大夫の兵部権大輔今大路孝道。（雑事日記）
●二月十一日、禁中（中御門天皇）月次和歌御会の題「残雪」、「園鶯」、「待恋」が届く。奉行は権中納言油小路隆典がつとめた。（雑事日記）
●二月二十四日、宝鏡寺宮理豊女王が、後西院より相伝した「御薫物方」を三時知恩寺門跡尊融尼へ相伝することとなり、祝儀として理豊女王へ干菓子一箱を贈る。使者は近習の菊池木工がつとめた。（雑事日記）
●二月、摂津国にある補陀落山総持寺住持の権大僧都隆阿の願いにより『総持寺縁起』が完成し、外題を揮毫する。本文の筆者は家凞・権大納言今出川公詮・故参議水無瀬兼豊・前大納言滋野井公澄・故権大納言愛宕通福（おたぎみちよし）・前権中納言櫛笥隆成・故一位庭田重条・故権中納言石井行豊・一乗院宮尊昭親王（官位は目録による）。識語を執筆したのは諸大夫の治部大輔今大路孝在。（秘鈔）
●三月七日、宝鏡寺宮理豊女王よりの「御薫物方」相伝に関し、挨拶として煎茶一箱と草花一筒を贈る。（雑事日記）
●三月十七日、霊元院より「花鳥之中」一枚の揮毫を命ぜられる。（雑事日記）
●三月二十八日、午刻、異母弟の保君と律君・異母妹の房君・山科道安が来邸する。申下刻に帰宅。（槐記）
●四月四日、興福寺の什物である「華原磬」・「泗濱石」・「妙童菩薩」が今出川の近衛邸にもたらされ、大書院に飾る。家凞や山科道安のほか、「御出入ノ者、家来マデ」参観した。（槐記）
●四月十五日、当座和歌会を催す。参加者は右京権大夫錦小路頼庸・極薗錦小路尚秀・春日社祠官の中東雅楽頭・諸大夫の兵部権大輔今大路孝道ほか。また、この日、禁中（中御門天皇）月次和歌御会の題「尋余花」、「初郭公」、「雨中竹」が届く。（雑事日記）
●五月二十六日、長崎に鎮座する諏訪明神の神主青木兵部大輔が来邸し、相続の御礼として「唐焼箱入」の「焼物入」を

贈られる。返礼として酒と吸物を振る舞う。（雑事日記）
　青木兵部大輔は主計頭青木長広の甥。長広は近衛家に出入りし、元禄六年五月に家凞が「諏方大明神」の額を揮毫し与えている。
●六月六日、禁中（中御門天皇）月次和歌御会の題と聖廟法楽和歌御会の題がそれぞれ届く。月次御会の奉行は左中将飛鳥井雅香が、聖廟御会の奉行は権中納言油小路隆典がそれぞれつとめた。聖廟御会の出詠は受諾するも、月次御会の出詠は断り、題をそのまま返上する。（雑事日記）
●六月十日、有卦入りの祝儀を催す。内々の祝儀で、招いた客は右大将鷹司房凞・極藹錦小路尚秀・山科道安。その他は女房のみの参加だった。多くの公卿より祝儀を贈られたが、「滋野井」（前権大納言滋野井公澄か）から贈られた、餅と干菓子が入った折櫃二合は故実に叶っているとして、道安に見せている。（槐記）
●六月十一日、山科道安へ祝儀として絹縮みを贈る。（槐記）
●六月二十二日、有卦入りの祝儀を催し、右大将鷹司房凞・左中将徳大寺実憲・山科道安らが参加する。家凞も参加予定であったが大暑のため欠席した。道安より常陸産の色変わり長柄団扇三本を贈られる。能と狂言の興行があり、シテは野村又三郎がつとめた。（槐記）
●七月二日、禁中（中御門天皇）七夕和歌御会の題「天河落檐」が届く。奉行は権中納言日野資時がつとめた。（雑事日記）
●七月九日、鹿児島藩士の倉橋金之丞が来邸し、同藩より合力金百五十両を贈られる。（雑事日記）
●七月十三日、弘前藩士の村上儀兵衛が来邸し、同藩より合力金百五十両を贈られる。（雑事日記）
　同日、和歌一首を詠ずる。「松為友／千歳経ん友と見てこそ植えつらめ　松は直〳〵誰がみぎりまで」。（雑事日記）
●七月十六日、「例年ノ如ク」右大将鷹司房凞・三時知恩寺門跡尊融尼・大覚寺門跡寛守（基凞の子で家凞の猶子）とともに河原御殿へ出掛け、東山の送り火を見る。この時、七夕和歌御会の題が話題になった。（槐記）
●七月十八日、家凞・三時知恩寺門跡尊融尼・右大将鷹司房凞・大覚寺門跡寛守が来邸する。夕方には山科道安と諸大夫（もと輪王寺宮諸大夫）の進藤夕翁も合流した。床の間の掛物には、「名物」と自慢する後西天皇勅賛・妙法院宮堯恕親王画の「滝図」を掛けた（ここに捺される朱印は家凞の作）。「滝図」は公益財団法人　陽明文庫に現存。また、この日も七夕和歌御会の題が話題になった。
　同日夜、庭の木の枝に酸漿提灯を掛けて遊ぶ。「兎角、風景云ハン方ナシ」。（槐記）
●八月十二日、儲皇昭仁親王が今出川の近衛邸へ行啓する旨が伝えられる。近年は儲皇の外祖が摂関家出身者であることがなかったため、「珍シキ御事」とされた。（槐記）
　同日、禁中（中御門天皇）月次和歌御会の題「湖上月明」、「連夜見月」、「寄月恨恋」が届く。（雑事日記）
●八月十八日、辰刻、儲皇昭仁親王が今出川の近衛邸へ密かに行啓する。侍の加治左衛門ら四名の乗馬を見学し、邸内の

庭や築山を散策。料理を済ませ、御霊祭を見物したのち、初更前に還御した。（槐記・雑事日記・続史）
●八月二十一日、「御祭」の料理を家凞へ贈る。家凞のもとで山科道安も相伴した。（槐記）
●十一月二十五日、寒中見舞いとして蒸鰈一箱を徳川吉宗と天英院へ、朝日焼一箱を法心院（家宣側室のお古牟）と蓮浄院（同お須免）へそれぞれ贈る。「如例」とあるので毎年贈っていたことが知られる。（雑事日記）
●十二月二日、三位平松時春（三十五歳）が出家し法名「夕可」を名乗る。この日、家久のもとへ時春の室およよ（交野時香の娘）が落飾許可伺いに来邸した。家久は時春を評価しており、「アレ程ノ人ノ入道ハ、最惜コト」と述べている。（槐記）
●十二月四日、方違えのため、平松入道夕可のもとへ出掛ける。（槐記）
●十二月十八日、年忘れを催す。家凞・左大将鷹司房凞・三時知恩寺門跡尊融尼・芳林院・山科道安が参加した。（槐記）
●十二月十九日、年忘れ参加の御礼言上のため、山科道安が来邸する。（槐記）
●十二月二十三日、蔵人頭櫛笥隆兼と同坊城俊将が来邸する。（雑事日記）
●十二月二十七日、娘の八世君が疱瘡により没、享年七。法号は紅顔院。八世君は十九日に発病し、山科道安が屋敷に詰めて治療にあたっていた。（系譜・槐記）
●十二月二十九日、八世君の逝去に関し、関白としての出仕の是非について、神祇大副藤波和忠・三位白川雅冬（前神祇伯）・二位吉田兼敬（元神祇権大副）らが召されて朝廷で詮議される。本来、七歳未満の者の死去には服忌は適用されないが、この月二十五日に立春を迎えていたため、八世君は八歳ではないかとされたことによる。詮議の結果、問題ない旨がこの日の寅刻に伝達された。（槐記）

享保十三年（一七二八）戊申　四十二歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝
●二月二十二日、家凞・山科道安が来邸する。この日、床の間に土佐光茂の娘（狩野元信の妻）筆の絵を掛け、仕舞を七番催した。（槐記）
●四月一日、儲皇昭仁親王が今出川の近衛邸へ行啓する。（続史）
●六月十一日、儲皇昭仁親王が皇太子に冊立される。この立太子式の次第を作進する。（続史）
●六月二十二日、嫡子となる男子が誕生する。母は家女房のおかつ。幼名は貞君で、のちの近衛家第二十三代当主の内前。（系譜）
　おかつ（のち陸奥と改称）は、京極宮家に仕える侍高木家の出身。おかつの弟高木掃部重興（のち京極宮家諸大夫）は、元文四年一月二十八日に初めて内前と対面している。（雑事日記・繰出）
●六月二十六日、妹の尚子（享保五年一月二十日薨去）に皇

太后が追贈される。参議高辻総長・左兵衛権佐交野惟粛が泉涌寺の墓所へ出向き、宣命を読み上げた。（続史）
●七月十日、鹿児島藩京屋敷留守居役が来邸し、合力金として百五十両を贈られる。（雑事日記）
●八月九日、家熙・山科道安が来邸する。小書院の床の間に明恵の書状を掛けた。（槐記）
●九月二日、中御門天皇より色紙四枚が到来し、この月十五日まで揮毫するように命ぜられる（内容不明）。奉行は権大納言日野資時など五名がつとめた。（雑事日記）
●十月一日、皇太子昭仁親王の仙洞（霊元院）御所行啓に供奉する。（続史）
●十一月一日、水戸藩主の参議徳川宗堯より、書状を添えて塩引鮭一尺を贈られる。（雑事日記）
●十一月八日、鹿児島藩より本年分の合力米のうち、百石を贈られる。（雑事日記）
●十一月十六日、家熙・内大臣鷹司房熙・三時知恩寺門跡尊融尼・山科道安を招き、恒例の口切の茶事を催す。囃子や仕舞なども催した。（槐記・雑事日記）
●十一月十九日、鹿児島藩より合力米百石（代銀三貫六百七十五匁）を贈られる。（雑事日記）
●十一月二十六日、左大将鷹司房熙が内大臣に任ぜられたため、今出川の近衛邸寝殿において、家熙・家久・房熙の三人による「父子同胞の拝礼」を行う。房熙へ引き出物も贈った。（槐記）
●十二月十九日、年忘れを催す。家熙・山科道安が来邸した。（槐記）

享保十四年（一七二九）己酉　四十三歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝
●一月一日、関白家拝礼と小朝拝参加のため参内する。（続史）
●一月二日、東宮拝礼と法皇拝礼に参加する。（続史）
●一月十三日、津軽采女（旗本で黒石領主の津軽政兕（まさたけ）か）より年始の挨拶として、金子三百疋を贈られる。（雑事日記）
●一月十五日、踏歌節会に参加する。節会は本来十六日に行われるが、この年は月蝕にあたるため前日に行われた。（槐記・続史）
●一月二十日、医師の林杏安・山科道安・村上等詮・浦野道英へ、当帰と地黄を各五斤ずつ贈る。（雑事日記）
●二月五日、中御門天皇より色紙が到来し、この月九日までに揮毫するように命ぜられる（内容不明）。（雑事日記）
●二月八日、家熙が来邸する。同じ日に京都所司代の佐渡守牧野英成も来邸した。（槐記）
●二月二十五日、尾張藩士の八尾市左衛門が来邸し、合力米代金六十五両三分と銀十二匁八分を贈られる。（雑事日記）
●三月十三日、午刻前後、左大臣二條吉忠・右大臣一條兼香・内大臣鷹司房熙・山科道安が来邸する。酉刻に帰宅。（槐記）
●三月十五日、仏参の帰途に立ち寄った家熙と対談する。十

五日は憲子内親王の命日に当たり、清浄華院への参詣か。（雑事日記）

●四月九日、武家伝奏の前権大納言園基香より書付が到来する。今出川新地の周辺で堂上方と牢人との接触が確認されるため、近衛家においても使用人に怪しい者が存在しないか常々吟味すべきよう伝達される。（雑事日記）

●四月二十四日、中御門天皇より『十躰和歌』の外題の揮毫を命ぜられる。（雑事日記）

●四月二十八日、広南より日本へ献上され江戸へ向かう途次で上洛した象を、禁裏台盤所の前庭で見物する。（繰出・続史）

●五月二日、中御門天皇の大乳母子である武田美作晴親（武田信玄の弟望月信繁の末裔）が来邸し、非蔵人として召し出されたこと（五月一日付）の祝儀として、鯛一折を贈られる。（雑事日記・『非蔵人座次惣次第』）

●五月十三日、古筆見の古筆了延が御機嫌伺いとして来邸する。（雑事日記）

●五月十八日、家凞・内大臣鷹司房凞・三時知恩寺門跡尊融尼・「滋野井殿御夫婦」（前権大納言滋野井公澄夫妻か）・諸大夫の治部大輔今大路孝在・山科道安を招いて、貞君の色直しを行う。（槐記）

同日、興福寺別当の一乗院宮尊昭親王へ、享保二年一月四日に焼失した南円堂を旧蹤のままに再建すべきことを、氏長者として右少弁柳原光綱を通じて命ずる。（続史）

●六月十五日、右少弁柳原光綱が、興福寺諸堂の壇上より仏像数十体が発見されたこと、南円堂の壇上より光が見えたこと、仏舎利が合計九粒発見されたことを中御門天皇に奏上する。これは家久の「所存」によってなされたことであった。（続史）

公益財団法人　陽明文庫には、この時に詠まれたと思しい中御門天皇宸筆の和歌懐紙が伝来する。「南円堂のありし跡に／舎利出現のこと／きゝて／おさまれる／世の嘉の／瑞にて／妙なる玉の／いでしをぞ思ふ」。

●六月二十一日、興福寺別当の一乗院宮尊昭親王へ、放光や仏舎利発見について叡感があったため、先蹤に従って速やかに勧学院に安置せしむべき旨を、右少弁柳原光綱を通じて命ずる。（続史）

●七月二日、寅刻、諸大夫の治部大輔今大路孝在の屋敷において女子が誕生する。母は家女房の小弁。幼名は峯君（家久が命名）。医師の林杏安と山科道安が詰める。峯君には乳母の式部卿が守り刀を持参した。（雑事日記）

●七月四日、鹿児島藩より合力金百五十両を贈られる。（雑事日記）

●七月十六日、三時知恩寺門跡尊融尼・内大臣鷹司房凞・芳林院・医師の御薗意齋・山科道安とともに、河原御殿へ出掛ける。（槐記）

●七月十八日、家凞・内大臣鷹司房凞・三時知恩寺門跡尊融尼・芳林院・医師の御薗意齋・山科道安らを招き、終日饗応する。（槐記・雑事日記）

●七月二十一日、侍従園池房季を和歌の門弟とする。この時

房季は十七歳。御礼として太刀馬代金百疋を贈られる。（雑事日記）

園池家は櫛笥隆致の次男宗朝を祖とする、江戸時代前期に興った家。房季の代、享保十三年十二月一日より近衛家の門流に加わった。（秘鈔）

●八月二日、弘前藩士の村上儀右衛門が来邸し、藩主土佐守津軽信寿より、合力金百五十両のうち七十五両を贈られる。（雑事日記）

●八月二十四日、禁中（中御門天皇）月次和歌御会に出詠する和歌短冊を、奉行の権大納言油小路隆典へ送る。（雑事日記）

●八月二十七日、右少将高野保房を和歌の門弟とする。この時保房は二十歳。（雑事日記）

高野家は持明院基定の次男保春を祖とする、江戸時代前期に興った家。保春の代、貞享三年より近衛家の門流に加わった。（秘鈔）

●九月一日、左衛門督飛鳥井雅香より、禁中（中御門天皇）重陽和歌御会の題「追年菊馥」が届く。（雑事日記）

●九月十八日、越中守津軽信興室となっていた綱君（家熙の養女。実父は醍醐冬基）が八日に亡くなったため、香典として白銀三枚を弘前藩京屋敷へ贈る。（雑事日記）

同日、権中納言徳大寺実憲を和歌の門弟とする。この時実憲は十六歳。御礼として太刀一腰・鱧一折・馬一疋を贈られる。（雑事日記）

●閏九月二十二日、家熙・内大臣鷹司房熙・三時知恩寺門跡尊融尼・異母弟の三宝院門跡実演・山科道安を招き、恒例の口切の茶事を催す。囃子五番・一調二番・仕舞三番も催した。（槐記）

●十月七日、夜、南円堂の仏舎利出現を詠んだ中御門天皇宸筆の和歌懐紙を叡覧に供える。他に皇太子昭仁親王・閑院宮弾正尹直仁親王・一乗院宮尊昭親王・内大臣鷹司房熙・「前内府公」（当時該当者四名が存在し未詳）も同席した。菓子や茶を献上して、十炷香を催した。（槐記）

●十月十四日、徳川五郎太（第五代尾張藩主）の十七回忌にあたり、見舞いとして菓子一箱を尾張藩京屋敷へ贈る。（雑事日記）

●十一月二十二日、当座和歌会を催す。参加したのは右中将滋野井実全・少納言西洞院範篤・左兵衛権佐交野惟粛・侍従平松時行・右少将高野保房・侍従園池房季。（雑事日記）

●十二月十八日、河原御殿の煤払いを避けるため、家熙・内大臣鷹司房熙・三時知恩寺門跡尊融尼・山科道安が来邸する。（槐記）

●十二月二十六日、大徳寺参詣の帰途に立ち寄った家熙と対談する。（雑事日記）

享保十五年（一七三〇）庚戌　四十四歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●六月五日、以前から近衛家への出入りを希望していた禁裏御用呉服商の八文字屋善兵衛が来邸し、奉書紙一束を贈られ

る。（雑事日記）
●六月二十日、未刻、上立売通室町西入ル北側の福岡藩御用呉服商の大文字屋五兵衛方より出火し、近衛家別邸の桜御所が罹災する（「西陣焼け」）。近衛邸には当番・非番を問わず多くの家臣が詰めた。（雑事日記）
●六月二十一日、西陣焼けで類焼した寺院・公家衆、また近衛邸に詰めた八瀬童子十五名などに金子や米を支給する。一方、諸大夫の越中守山科範正は、多年奉公の者にも関わらず昨日の火災当日にもこの日にも参上しなかったのは「言語道断」として、範正へ蟄居を命ずる。（雑事日記）
●六月二十二日、山科道安が来邸する。西陣焼けの際に道安が近衛家へ駆けつけたことに対し、褒賞する。（槐記）
　同日、山科道安が河原御殿へ出掛け、諸大夫の石見守中川長堅と対談する。鷹司房凞（この年四月二十四日薨去、享年二十一）の後継として異母弟の岩君（五歳）に鷹司家を相続させることが同家の諸大夫から願い出されたが、岩君が未だ幼いため、「今暫ク其侭ニテ御別業（河原御殿。岩君の住まい）ニ御座ナサルヤウ」伝えられた。しかし家久が「若シ故内府（房凞）ノ御子アリテ。斯ク御幼稚ナラバ。何方へ預ケ申スニヤ」として一蹴したことを、「関白公ノ御怜悧、今更申モ愚ナリ」と噂する。（槐記）
●八月二十五日、大徳寺芳春院に金子二百疋と唐紙に書写した和歌「普門品／世を照らす光普き門にこそ　弘き誓の海もありけれ」を贈る。観音菩薩を祀る同寺より、寄附と「御代々御筆物雖所持仕、当御所（家久）御筆物未拝受」の理由で揮毫を求められていたため。（秘鈔）
●十二月七日、医師の浦野道英・林杏安・山科道安・村上等詮・上田養安へ、当帰と地黄五斤ずつを贈る。（雑事日記）
●十二月十六日、右中弁清閑寺秀定が来邸し、この月十七日に行われる東山院の法要の際に用いる諷誦文と願文（青蓮院宮尊祐親王筆）を内覧し、使用許可を与える。（雑事日記）

享保十六年（一七三一）辛亥　四十五歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝
●三月十二日、諸大夫の左馬頭進藤長冨より、病気のため家督相続に関わる願いが出される。長冨には実子がなかったため、急遽、非蔵人松室伊賀重定の末子万次郎と諸大夫の進藤夕翁の孫友松を養子とするよう命ずる。（雑事日記）
●三月十四日、諸大夫の左馬頭進藤長冨が卒、享年三十六。香典として白銀三枚を贈る。また、進藤夕翁へ蒸籠二と長冨室の清性院（俗名渡部いと）へ棹菓子一折を贈る。（雑事日記）
●四月十八日、諸大夫の石見守中川長堅へ、長冨養子の万次郎と友松が成長するまで、家号を進藤に改め、進藤家の知行百三十石のうち百石を相続するよう命ずる。また、長冨未亡人清性院と長堅とが梨木町の進藤邸で同居することを認めず、清性院は三本木の進藤家別宅へ引き移るように命じた。（雑事日記・繰出）
●四月二十日、弟の鷹司房凞の一周忌にあたり、西王寺で法

要を行うことを命ずる。（繰出）
●四月二十五日、今出川の近衛邸において興福寺の宝物が開帳され、鑑賞のため家凞・房君・律君・三時知恩寺門跡尊融尼・山科道安が来邸する。家凞は午前中に帰宅。その後奥小書院で尊融尼と食事を摂った。（槐記）
●五月五日、中御門天皇より、前権大納言滋野井公澄落飾に関わる書状が届く。（雑事日記）
●五月九日、滋野井入道良覚（俗名公澄）へ、落飾の祝儀として肴一折・紗一巻・唐扇子などを贈る。（雑事日記）
　同日、備後国鞆に鎮座する祇園社の神主中須賀宮内少輔の願いにより、所持する蝙蝠扇を贈る。取次は諸大夫の兵部大輔今大路孝道。（秘鈔）
●七月二日、天英院の使者後藤縫殿丞が来邸する。権大納言勧修寺高顕の娘を江戸へ召し出すに付き、支度金として百両を託される。百両はただちに勧修寺家の雑掌へ送られた。（雑事日記）
●七月十日、左少弁柳原光綱に命じて、青蓮院護持本尊の画図を加封する。（続史）
●七月十九日、乳母の式部卿が没、享年八十二。式部卿の先祖一統の墓所がある田中村の本満寺へ葬られる。香典のほか「御内々御恵み」を贈った。（雑事日記）
●八月十九日、巳刻、以前より近衛家への出入りを希望していた医師の三輪了詮・森三竹・長崎年寄の薬師寺久左衛門が来邸し、対面する。（雑事日記）
●九月二日、留守の間、『春日権現験記絵巻』閲覧のため参議難波宗建・蔵人頭滋野井実全・左少弁柳原光綱・左兵衛権佐交野惟粛・権大納言櫛笥隆成が来邸する。家司らが蕎麦切りを出してもてなした。（雑事日記）
●十月六日、家凞・山科道安を招き、恒例の口切の茶事を催す。素謡も催した。（槐記）
●十一月二十五日、女房小弁の弟の片岡孫三郎が蔵人頭滋野井実全の仲介によって中御門天皇の皇子三宮（翌年親王宣下を受けて忠篤親王と名乗る。のちの聖護院宮忠誉親王）に仕えることになり、御座の間において孫三郎と初めて対面する。吸物や酒を振る舞った。（雑事日記）
●十二月三日、東本願寺第十七世法主真如光性の子光養麿を猶子とする。東本願寺より近衛家の人々へ多くの祝儀が贈られた。（雑事日記）
　光養麿は、のちの玄如光乗。実父真如に先立って示寂したため、現在、玄如は東本願寺の歴代に数えられていない。
●十二月十九日、御匙医師辞退を申し出るため、山科道安が来邸する。諸大夫の内蔵権頭今大路孝道が対応した。（槐記）

享保十七年（一七三二）壬子　四十六歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝
●一月三日、長崎年寄の薬師寺久左衛門が年始挨拶のため来邸し、織物一巻・唐墨などを贈られる。（雑事日記）
●二月二十八日、辰半刻、猶子の光養麿が得度するため、近習の藤林兵庫・菊池木工・村井右膳・仙石右門・中川隼人・

藤林主水と山科道安を従えて、東本願寺へ出掛ける。得度の後、能六番と狂言四番も催される。夜四ツに帰宅。（槐記・雑事日記）

●三月二十九日、家凞・三時知恩寺門跡尊融尼・三宝院門跡実演・芳林院・山科道安が来邸する。謡四番と仕舞八番を催した。（槐記）

●四月十五日、三時知恩寺門跡尊融尼から発句の批評を依頼され、その使者として山科道安が来邸する。この時、自作の発句「白菊の露は知らずや千代の色」に、連歌師の猪苗代兼育が「声ばかりこそ秋の松風」と脇を付けた例を示し、連歌の詠み方について言及した。（槐記）

●四月頃、仙台藩主の左中将伊達吉村へ、銘「柴舟」の香を所望し、合わせて「世を渡る慰めにせんわが方へ　寄せよ柴舟それならずとも」の和歌一首を贈る。吉村からは少しだけ贈られ、もはや残りがない旨を「言の葉の匂ひしなくば柴舟も　波の朽木と（『槐記』では「底木に」）なしやはてまし」の返歌で告げられた。（槐記・秘鈔）

●閏五月十五日、家凞・三時知恩寺門跡尊融尼・芳林院・滋野井入道良覚・蔵人頭滋野井実全・儒者の松下見櫟・堀南湖らとともに奈良の唐招提寺の宝物を自邸で鑑賞する。持参した円光院と蔵性院へ白銀二枚を贈る。（雑事日記）

●六月二十五日、禁裏御用鍼医師の駿河守藤木成常とその弟土佐守成敬が来邸する。「向後御心安御出入」するべき旨を伝え、御座の間で対面した。（雑事日記）

●七月三日、娘の延君の十三回忌法要につき、大徳寺へ白銀五枚を贈る。（雑事日記）

●七月十六日、家凞のもとへ出掛ける。「御用」があったため早々に帰宅した。（槐記）

●八月六日、霊元院が崩御、宝算七十九。この時、別に勅が出て除服を命ぜられた。（槐記）

朝廷の歌壇主宰者であった霊元院から、歌人としての高い評価を受けることは遂になかった。「霊元上皇希世の聖主にまし〳〵、敷島の道にはことさら叡慮を加へ御教導ありしかば。堪能の人あまた世にあらはれけり。公（吉宗）にもいよ〳〵諸道をあげ用ひさせたまはんの御志なれば、元文（ママ）の頃、関白兼香公に御旨を伝へられ、公卿中和歌にすぐれたる方々を選びて聞え給ふべしとありしかば、関白より上皇に奏聞ありしに、とり〴〵聞えあれど、まづうちつけには中院通躬・三條西公福・烏丸光栄・冷泉為久に超えたるはあるまじと定められる」とあるように、家久の名前は挙げられていない。（実紀〈有徳院殿御実紀附録巻十六〉）

●八月二十二日、堺大寺より書状とともに水仙花二茎を贈られる。「如例」とあるので、例年のことであったらしい。（雑事日記）

●九月八日、中御門天皇の食膳に魚味を供するよう建言する。これはこの年八月六日に霊元院が、また八月三十日には敬法門院（松木宗子。天皇の祖母）が相次いで崩御していることによるもの。（続史）

●十月十九日、伊予吉田藩主の若狭守伊達村豊より塩漬鯛一桶・黒漬鰯一桶を贈られる。「如例」とあるので、例年のこ

とであったらしい。（雑事日記）
●十月二十三日、霊元院の御遺物分けとして、鞘巻・太刀（銘国定）一振・花瓶・花台を贈られる。（雑事日記）
●十月二十四日、家凞・三時知恩寺門跡尊融尼・山科道安を招き、恒例の口切の茶事を催す。床には後西院と「一條禅閤兼良公」（昭良の誤記か）の勘返状を掛けた。（槐記）
●十一月二日、女房のおかつが、呼び名を「陸奥（みちのく）」に改める。（雑事日記）
●十一月五日、有卦入り。諸方よりの献上物が「岡ノ如シ」。床には後奈良院宸筆の懐紙を掛けた。また、有卦入りに伴い、三時知恩寺門跡尊融尼・右京権大夫錦小路頼庸・山科道安が来邸する。道安より祝儀として台に乗せた金色紙五枚を贈られた。（槐記）
●十一月六日、山科道安が来邸する。昨晩の返礼として、袱紗と茶巾の入った文箱を贈る。（槐記）
●十一月十七日、十炷香を催す。蔵人頭滋野井実全・右京権大夫錦小路頼庸・山科道安・近習の滝一学と中川隼人・「大蔵権少輔」（諸大夫の大蔵大丞齋藤昌全か）が参加。一座目の一種は一乗院宮尊昭親王など来客が多数のため、また、二座目の最後は火災が発生して参内したため、聞くことができなかった。（槐記）
●十一月二十二日、辰刻、貞君の着袴の儀を行う。家久は小直衣姿で小書院上段中央に着座した。蔵人頭滋野井実全・「平松三位殿」（平松入道夕可か）・「船橋侍従殿」（船橋親賢か）が参列し、近衛家側より諸大夫の内蔵権頭今大路孝道・上臈のおとき・女房の豊浦と小弁が同席した。（槐記）
●十二月二十八日、来春の太政大臣就任を打診される。最初は不才を理由に固辞し、家凞に伺いを立ててから判断するとしたが、たっての要請により就任することとなった。（槐記）
●十二月か、男子が誕生する。母は家女房の陸奥。幼名は寛君。（雑事日記）

享保十八年（一七三三）癸丑　四十七歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝
●一月三日、山科道安が来邸する。（槐記）
●一月二十五日、皇太子昭仁親王の元服につき、自邸で太政大臣の宣下を受ける。大書院の床は『賢聖障子』の写し三幅対を、小書院の掛物は中御門天皇宸筆和歌懐紙（「禁中佳趣」）をそれぞれ掛けた。山科道安が来邸してこの様子を拝観した。（槐記・雑事日記・家譜）
　同日、奏慶。蔵人頭滋野井実全・同万里小路稙房・左兵衛権佐交野惟粛らが扈従した。（続史）
●一月二十六日、直衣始。左大弁日野西資敬（すけゆき）ほか二人が扈従した。（続史）
●一月二十七日、天英院より金子三百両を贈られる。（雑事日記）
●二月一日、午刻、紫宸殿において皇太子昭仁親王の元服の儀が行われ、加冠をつとめる。理髪は従兄弟にあたる東宮大夫徳大寺実憲がつとめた。（家譜・続史）

●二月二日、皇太子昭仁親王より、真太刀・紗綾五巻・鯛一折（二尾）を贈られる。この使者をつとめたのは近衛府の甲斐守渡辺供信で、引き出物として金子二百疋・熨斗・昆布を贈り、酒を振る舞った。（雑事日記）

●二月八日、吉田社へ参詣し奉幣する。侍従吉田兼雄が扈従し、前駈を右中将八條隆英ほか三人がつとめた。（続史）

●二月十三日、弟の鷹司岩君が元服し、加冠をつとめる。理髪は蔵人頭万里小路稙房がつとめた。岩君は尚輔と改名した。（雑事日記・続史）

●二月十九日、息子の寛君を堀川御殿（基凞旧居）の芳林院へ預けることとなり、内々に黄金一枚・樽一荷・生肴一折を贈る。寛君には御方料として三十石を付属させた。（雑事日記）

●三月十八日、近衛家領の摂津国伊丹の酒造業大鹿屋坂上宗清が百歳を迎えたため、祝儀として紗綾二巻を贈る。（雑事日記・繰出）

●四月八日、御礼言上のため、伊丹より大鹿屋坂上宗清が来邸し、餅（百入り）一箱・長昆布一折・熨斗一折を贈られる。大書院において貞君とともに対面し、小謡などを催す。酒や吸物を振る舞った後、宗清が庭を歩く様子を見物した。（雑事日記）

●四月十一日、医師の浦野道的より、禁裏より扶持を拝領した礼として肴一折を贈られる。（雑事日記）

●四月二十九日、黄檗僧の百拙元養が来邸し、自坊に「法蔵寺」の名称が公儀より許可された礼として、昆布三十本を贈られる。（雑事日記）

●六月十三日、妙顕寺の僧日瑛が来邸し、紫衣勅許の礼として杉原紙十帖・白銀二枚・縮緬二巻・菓子と昆布一折・樽代五百疋・古硯（銘「丹波能」）・管夫人画、趙子昂賛の『赤壁賦』手鑑一冊を贈られる。他に家凞・貞君・娘たち、近衛家に仕える諸大夫・女房・近習・青侍・坊主・女中・下部に至るまで祝儀が贈られた。（雑事日記）

●六月二十日、前内大臣醍醐冬熙より、錦小路頼庸筆の「讃之物」三幅と『百人一首』の外題の揮毫を依頼される。この月二十九日に完成した。（雑事日記）

●七月三日、内侍所修理のため、生絹二疋と肴一種を添えて、「覆御衣」を寄附する。侍従吉田兼雄のもとへ贈った。（雑事日記）

●八月十三日、卯半刻、娘の知君が江戸へ向けて出発する。大書院の東縁側より輿に乗り下向した。警衛には京より与力や同心が江戸までその任にあたった。（雑事日記・実紀）

●八月二十一日、中御門天皇が和歌天仁遠波を前権大納言武者小路実陰より相伝する。（続史）

●八月二十八日、娘の知君が無事に江戸に到着した祝いを行い、家凞・三宝院門跡実演・三時知恩寺門跡尊融尼・芳林院・右京権大夫錦小路頼庸・山科道安が来邸する。囃子や仕舞を催した。（槐記）

●九月十四日、基凞の命日につき、大徳寺へ参詣する。（雑事日記）

●十月十四日、中御門天皇より色紙が到来し、揮毫するよう

に命ぜられる（内容不明）。（雑事日記）
●十月十六日、近衛家の御用金が払底したため、大坂の商人川﨑屋浅井源兵衛に銀五十貫を用立てるように近衛家より依頼したところ、金子五百両を川﨑屋の手代が持参する。来春より十年間での分割返済と決まった。（雑事日記）
●十一月十三日、仁和寺門跡惣在庁の大蔵卿法印高橋維仙が来邸する。以前より近衛家への出入りを希望しており、この日に対面し、扇子一箱を贈られる。（雑事日記）
●十二月二日、家凞の有卦入りにつき、裘代と花橘の作り物（薫き物が入った香合を数寄袋に入れ、枝に結ぶ）を贈る。（雑事日記）
●十二月十五日、東山院の二十五回忌にあたり法華八講が行われ、その第三日目に参仕する。（続史）
●十二月二十三日、午刻、権大納言徳大寺実憲へ伝授を行う（和歌天仁遠波伝授か）。相伝後、雑煮・吸物・酒をともに飲食する。さらに実憲の帰宅後、雁一羽を贈る。実憲よりは太刀馬代銀一枚を贈られた。（雑事日記）
●十二月二十七日、太政大臣を辞する。（家譜・続史）
●十二月三十日、今宮社の神主佐々木甲斐守が来邸し、正五位下勅許の礼として杉原紙十帖と巻数一箱を贈られる。（雑事日記）

享保十九年（一七三四）甲寅　四十八歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月一日、関白家拝礼・東宮拝礼と小朝拝参加のため参内する。（続史）
●一月二十三日、参議万里小路稙房・同難波宗建・同滋野井実全らの和歌門弟が来邸する。持参した禁中（中御門天皇）和歌御会始に出詠する懐紙を批評した。（雑事日記）
●一月二十四日、禁中（中御門天皇）和歌御会始に参加する予定であったが、咳と痰が悪化したため欠席する。本来出詠するべき懐紙は、奉行の前権大納言日野資時へ託した。（雑事日記）
●一月二十六日、東宮（昭仁親王）和歌御会始に参加する予定であったが、病気が治らず欠席する。（雑事日記）
●二月十四日、長崎奉行の因幡守細井安明より、年始の挨拶として唐紙一束・唐筆・唐墨を贈られる。（雑事日記）
●二月十六日、この月九日に得度した大覚寺門跡信性（異母弟の律君。のち寛深）より、得度の祝儀として太刀馬代・綿五把・肴代二百疋・樽代三百疋を贈られる。使者をつとめる坊官の野路井大蔵卿（盛庸か）と対面し、酒を振る舞い、引き出物として百疋を贈る。家久のほか、貞君・女房の豊浦・小弁・陸奥、近衛家に仕える諸大夫・近習・青侍・坊主・女中・下部に至るまで大覚寺より祝儀を贈られた。（雑事日記・続史）
●二月二十七日、翌日催す近衛家における和歌会始に、山科道安を誘う。近習の加治掃部と村井主膳が連名で書状を道安に送った。（槐記）
●二月二十八日、暮れ過ぎ、中絶していた近衛家における和

歌会始を再興する。題「庭松春久」、出題は左衛門督飛鳥井雅香、読師は権中納言高倉永房、講師は少納言交野惟粛、講頌は前参議持明院基雄、奉行は侍従平松時行がそれぞれつとめた。但し、中御門天皇よりこの和歌会始へ御製を賜ったため、御製のみは読師を家久が、講師を参議滋野井実全が特別につとめることになった。（槐記・雑事日記・続史）

この時の御製の宸筆和歌懐紙が、公益財団法人　陽明文庫に伝来する。軸装、一幅。本紙には緑色の染紙を用いる。「庭松春久／幾はるもかさねてをみよ軒端／なる／まつのことの葉つきぬためしに／家の会はじめ／いく春もとおもふ／こゝろばかりに／なむ」。「当今御製宸筆（庭松春久 享保十九初夏）」と書かれた家久筆の添札が付属している。（茶道資料館『宸翰―近衛家伝世・陽明文庫の名蹟―』展図録）

この日の和歌会始の参加者は、閑院宮弾正尹直仁親王・権大納言徳大寺実憲・権中納言高倉永房・同櫛笥隆兼・前権中納言高野保光・参議難波宗建・同滋野井実全・前参議持明院基雄・左衛門督飛鳥井雅香・右兵衛督西洞院範篤・右中将八條隆英・少納言交野惟粛・兵部大輔芝山季憲・少納言長谷範昌・侍従平松時行・左中将持明院家胤・右少将園池房季・侍従石井行忠・右中弁柳原光綱・右少将山本実親・同町尻兼久・弾正少弼山井氏栄・極薗錦小路尚秀・差次蔵人北小路俊包・氏蔵人慈光寺房仲・右京権大夫錦小路頼庸、諸大夫の内蔵権頭今大路孝道・大蔵大丞齋藤昌全、連歌師の法眼猪苗代兼郁・法橋猪苗代兼竹。懐紙に書写された和歌は錦小路頼庸を皮切りに、地下→殿上人→納言→閑院宮→家久の順で披講された。

近衛家における和歌会始は久しく中絶していたが（『槐記』によれば、尚嗣の時代まで続いたという）、今回の再興は以前の禁中和歌御会始において家久と中院通躬へ「和歌会始ヲ催セ。御製モ下サレン」という中御門天皇よりの勅諚があったためであり、「私ニ思召立タルニモ非ズ。余儀ナキ」ことであった。家久は老輩の通躬が先に催すよう腹案があったが、結果的に家久が先に催すことになった。（槐記）

●三月四日、以前より近衛家への出入りを希望していた、興聖寺に仕える堀川但馬守・堀川因幡守、少外記山口友俊・その子内蔵助千俊・行事官の和泉守山口春清、松平石見守配下与力の手嶋郷右衛門、窪安治・高橋定安の出入りを認め、大書院で対面し各人より扇子一箱を贈られる。また、口祝を贈り、吸物と酒を振る舞った。（雑事日記）

●三月二十二日、鹿児島藩主の大隅守島津継豊より、寛深得度の祝儀として箱肴一種を贈られる。（雑事日記）

●四月一日、参内する。また、参内前に以前より近衛家への出入りを希望していた高松采女正（伝未詳）と対面する。（雑事日記）

●四月十一日、女房の豊浦の名を左近と改名し、貞君の乳人に任ずる。（雑事日記）

●四月十八日、以前より近衛家への出入りを希望していた非蔵人の中川阿波元伸・大西備前親盛・橋本上総定恭・橋本駿河堯常が来邸する。（雑事日記）

●四月二十一日、貞君が元服し、名字「内前」を中御門天皇

より勅賜される。加冠を家久が、理髪を権中納言高倉永房がそれぞれつとめた。元服式に参加したのは権大納言徳大寺実憲・権中納言高倉永房ほか五名。（雑事日記・続史）

●四月二十五日、内前の元服を祝した能を催す。山科道安らが同席した。（槐記）

●五月一日、内前を伴って河原御殿へ出掛ける。家凞へ生肴一首を贈った。（雑事日記）

●六月二十三日、娘の知君（のち森姫と改名。さらに元文四年六月二十八日に通姫と改名したことが江戸より伝達される）と右衛門督田安宗武との縁組が決まる。（実紀）

●六月二十九日、知君と右衛門督田安宗武との縁組が、在江戸の武家伝奏前権大納言中山兼親より伝えられる。（雑事日記・繰出）

●七月八日、鹿児島藩より合力金百五十両を贈られる。（雑事日記）

●八月十九日、常子内親王の三十三回忌にあたり、大徳寺芳春院へ白銀三十枚・茶一壺・虎屋調製の蒸籠四組などを贈る。また、西王寺へ法事を行うよう命じ、法事料として金子五両・茶一器・蒸籠二組を贈る。（雑事日記）

●八月二十二日と二十三日、常子内親王の三十三回忌法要にあたり、西王寺へ二十二日の巳刻より『金剛般若経』と『楞厳呪』の読誦を、二十三日の辰刻より午刻までは懺法を行うことを命ずる。（雑事日記）

●九月十四日、鹿児島藩御用絵師の木村探元が、家久の招聘に応じこの日鹿児島を出立する。（京記）

●九月十八日、以前より近衛家への出入りを希望していた長崎糸割符仲間の奥村善兵衛が来邸し、毛氈三枚を贈られる。（雑事日記）

●十月五日、以前より近衛家への出入りを希望していた表具師の並河長兵衛へ、出入りを許可する。（雑事日記）

●十月十三日、徳川家宣の二十三回忌にあたり、知恩院へ納経する。（雑事日記）

●十月十七日、木村探元が上洛し、鹿児島藩京屋敷留守居役の堀万右衛門と同道で来邸する。この日は直接対面しなかったが、吸物や酒が振る舞われ、また近習の村井右膳を通じ屏風などの揮毫について相談した。（雑事日記・京記）

●十月二十三日、木村探元が堀万右衛門とともに来邸し、対面する。印石一箱・石本一帖・唐筆一箱などを贈られる。奥書院で探元に「此度のぼつたに付而、何か世話であろふ」、「久しうで逢た。国元でも入道・須磨無事じやげな。此度無心を言にはる〳〵のぼつて苦労なことぢや」と声を掛けた。（雑事日記・京記）

●十月二十五日、長崎奉行の因幡守細井安明が江戸下向の途次に上洛したため、宿舎へ生干鯛一箱を贈る。（雑事日記）

●十一月十日、家凞により享保十七年より行われていた『春日権現験記絵巻』二十巻の全巻模写が完成（詞書は家凞筆、絵は渡辺求馬〈始興〉筆）し、家久のもとへ送られる。これにより褒美として求馬へ白銀十枚と縮緬一反を贈る。この『春日権現験記絵巻』は近衛家の文庫へ納められ、「御珍蔵物也」とされた。（雑事日記）

●十二月十五日、町奉行所与力の田中万平より、時候挨拶として朝鮮焼の茶碗を贈られる。（雑事日記）
●十二月十八日、上洛中の法橋木村探元（法橋に叙せられたのはこの年十一月二十七日）へ、「寒天之節、絵相調太儀」であるため、樽と鴨二羽を贈る。（京記）
●十二月二十六日、東本願寺の坊官と家老を呼び対面する。「新御門主」（玄如光乗）の平生の不行跡が耳に届いたため、必ず諫言するように命ずる。（繰出）

享保二十年（一七三五）乙卯　四十九歳　従一位関白／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月十八日、前年より法橋木村探元へ揮毫を依頼していた山水屏風が完成する。これを見て「殊之外宜出来仕候」と喜んだ。（京記）
●一月二十五日、家凞・房君・三時知恩寺門跡尊融尼・芳林院・山科道安が来邸する。（雑事日記）
●一月二十八日、近衛家における和歌会始を催す。題「寄代祝君」、出題は左衛門督飛鳥井雅香、読師は権中納言難波宗建、講師は左中弁広橋兼胤、講頌は権中納言持明院基雄、奉行は侍従平松時行がそれぞれつとめた。上座には家久のほかに、閑院宮弾正尹直仁親王と一乗院宮尊昭親王が座った。（京記・続史）
　同日、法印岡松良安より、越前より到来した大蟹を贈られる。（雑事日記）
●二月八日、近衛家家司らによる月次寄合が行われる。当時金銀ともに不足しており、「各令頭痛而已」だった。（雑事日記）
●二月十一日、もと尚子附で当時牢人していた大石帯刀信興・渡辺求馬・中大路勘之進季軌・松田早之丞宣福が東宮御所へ召し出されることとなり、各人より肴を贈られる。（雑事日記）
●三月二日、黄檗僧の百拙元養が鳴滝村泉谷に法蔵寺を創建するにあたり、二階建て唐破風付きの「古御殿」を家凞と共同で寄進する。但し三月中は多忙のため、引き渡しは翌月と決めた。（雑事日記）
●三月七日、娘の知君の結納の祝儀として、二条百目目付の土屋長太郎・将軍徳川吉宗の使者として京都所司代の丹後守土岐頼稔が来邸する。（京記）
●三月八日、娘の知君の結納の祝儀に、公家衆が来邸する。（京記）
●三月十八日、中御門天皇の譲位と皇太子昭仁親王の受禅の祝儀として、徳川吉宗より太刀銀五十枚を贈られる。（実紀）
●三月二十日、法橋木村探元へ揮毫を命じていた自身用の三幅対の下書きを見る。探元へ「皆々宜出来候。此通りに清書可仕候」と重ねて命じた。（京記）
●三月二十一日、皇太子昭仁親王が、内裏において受禅する（桜町天皇）。関白は元の如しの宣下を受ける。（続史）
●三月二十二日、前日受禅した桜町天皇へ、祝儀として太刀馬代銀一枚・小屏風一双・樽一荷・昆布一箱・干鯛一箱を献

上する。（雑事日記）
●三月二十七日、中御門院の仙洞御所への遷幸に供奉する。（続史）
●三月三十日、夜、中御門院の布衣始に参仕する。（続史）
●閏三月五日、法橋木村探元に揮毫を命じていた朱書きの鍾馗二幅が完成する。家久は「長銘」を好んだため、探元は落款を「薩陽大弐法橋探元」と記した。「大弐」の通称は、家久が書付とともに探元へ与えた。この朱書きの鍾馗一枚は、のちに参議滋野井実全に贈られた。（京記）
●閏三月十日、午刻、法橋木村探元とその弟子の元春と権八の二人が来邸し、席書を命ずる。また、探元へ雪舟筆の屏風と『春日権現験記絵巻』を見せる。（雑事日記・京記）
　同日、内前・閑院宮弾正尹直仁親王・一乗院宮尊昭親王・妙法院宮堯恭親王・「毘沙門堂宮」（輪王寺宮公寛親王か）・参議滋野井実全・少納言交野惟粛・侍従平松時行に探元を紹介する。（京記）
●閏三月十二日、鳴滝村泉谷の法蔵寺へ、「御裏方」が使用していた旧殿を寄進する。（繰出）
●四月二日、法橋木村探元へ揮毫を命じていた三幅対が完成し、探元が持参する。（京記）
●四月八日、暇乞いのため来邸した法橋木村探元と対面する。「久々滞在で苦労な事じゃ。頼んだ絵共皆見事に成就して、殊に此度御所の御用も首尾能御機嫌之事で手がらなことじゃ」云々と労いの言葉を掛け、餞別として探元へ白銀と真綿十枚ずつを贈った。（京記）
●四月十八日、法橋木村探元が、全ての用事を済ませ京を出立する。五月十一日に帰国した。（京記）
●五月七日、松平主殿頭（島原藩主の松平忠雄か）の御用呉服商山形屋松岡吉右衛門の願いにより、近衛家への出入りを許可する。毛氈二枚を贈られ、吸物や酒を振る舞った。（雑事日記）
●五月十一日、醍醐家諸大夫の越後守高津時芳より、朝鮮鴨二羽を贈られる。（雑事日記）
●五月十三日、禁中（桜町天皇）和歌御会始が行われる。御会には中御門院も行幸した。題「寄道祝世」、出題は民部卿冷泉為久。この時の御製の読師をつとめる。（続史）
　中御門院御製「くれ竹のよゝに／かはらでおさめ／ゆく／道すぐなりと／きくがうれし／さ」、桜町天皇御製「詠寄道祝世／倭哥／をしなべてすなほなる／よもさかへ行ことは／の道のひかりとぞ／おもふ」。この両和歌懐紙は読師をつとめた家久へ下賜され、この年七月一日に同一の表装で完成した。家久自筆の添状が付属し、家久の和歌「よろこびをとりかさねけりきみ〳〵に　さかへなれぬるわれなればこそ」の一首も書き付けられている。公益財団法人　陽明文庫蔵。（茶道資料館『宸翰―近衛家伝世・陽明文庫の名蹟―』展図録）
●五月十五日、曾祖母の瑤林院の三十三回忌（翌日十六日）の法要が西王寺で行われることとなり、香典として金子三百疋を贈る。（雑事日記）
●五月二十五日、中御門院が三部抄を前権大納言武者小路実

陰より相伝する。祝儀として肴一種を献上する。（雑事日記・続史）

同日、中御門院が「和歌三事書」を前権大納言烏丸光栄（みつなが）より相伝する。祝儀として院へ肴を献上する。（雑事日記）

●六月二日、桜町天皇が内裏昼御座において御書始を行い、『後漢書』明帝紀を読む。侍読は式部権大輔唐橋在廉（ありかど）、尚復は文章博士五條為成（ためなり）がそれぞれつとめた。この時の次第を家久が作進した。（続史）

●六月十六日、「如例年」嘉祥を行う。近衛邸大書院縁側に諸大夫以下近習まで十人を召し、祝儀として切り麦を贈った。（雑事日記）

同日、内裏で月見御祝を行う。中御門院も行幸した。家久の建言により、『後奈良院宸記』の趣をもって、桜町天皇は終夜就寝しなかった。（続史）

●六月二十日、大坂の町人和泉屋理右衛門の願いにより、近衛家への出入りを許可する。中奉書一束を贈られ、吸物や酒を振る舞った。（雑事日記）

●七月七日、甲斐守藤木司直より、桜町天皇の即位式に用いる万歳旗揮毫の願い出を受ける。（雑事日記）

●七月八日、仙台藩主の左中将伊達吉村より、伊達政宗の百回忌勧進和歌を詠じた礼として、料紙一箱と天瓜粉一箱を贈られる。この時、家久の和歌門弟として出詠したのは、閑院宮弾正尹直仁親王（礼は杉原紙一箱）、権大納言徳大寺実憲（礼は金子五百疋。以下同じ）・右兵衛督西洞院範篤・少納言交野惟粛・同長谷範昌・侍従平松時行・左中将持明院家胤・右中将園池房季・侍従石井行忠・左中将七条信全・右少将町尻兼久・弾正少弼山井氏栄・右少将山本実覩。（雑事日記）

●八月二十七日、「数百年中絶」（『看聞秘鈔』）していた六位侍を再興させる。従六位下に任ぜられたのは、近習の兵庫少允藤林惟忠（旧称兵庫）と主計少允松本憲之（旧称采女）の二人。（雑事日記・秘鈔）

●八月二十九日、来たる九月十一日に例幣を伊勢神宮へ発遣するため、神事に入る。近衛邸門前に注連を引き渡し、「例幣発遣／来十一日／御神事也僧尼重軽服不浄不可参入」と書かれた門札を掲げた。（雑事日記）

●九月一日、甲斐守藤木司直が清書した万歳旗を左中弁柳原光綱が持参し、これを見る。（雑事日記）

●十月四日、桜町天皇即位慶賀のため、徳川吉宗の使者として彦根藩主の掃部頭井伊直定・高家の大和守中条信実が派遣される。この時、家久への祝儀太刀銀百枚を随身した。（実紀）

●十月二十八日、即位式に用いる礼服を、内大臣久我惟通（ありみち）らと検分する。（続史）

●十一月三日、紫宸殿において桜町天皇の即位式が行われ、「即位御前儀新次第」を献上する。（続史）

●十一月四日、即位式の祝儀として、桜町天皇へ太刀馬代銀一枚・錦三端・昆布一箱・干鯛一箱・樽一荷を、中御門院へ一荷二種をそれぞれ贈る。（雑事日記）

●十一月十七日、弟の鷹司尚輔の急逝（享保十八年三月六

日）によって鷹司家を相続した基輝（右大臣一條兼香の次男）が来邸する。小書院で対面し、肴一種を贈られた。この時、基輝へ作り物の松の打枝を添えた藤原教家筆の巻子手本を贈った。（雑事日記）

●十一月十八日、甲斐守藤木司直が来邸する。今回の即位式で万歳旗を清書できたのは「偏ニ殿下御影（ママ）」との挨拶を受ける。（雑事日記）

●十二月十八日、江戸において、娘の知君（森姫）と右衛門督田安宗武とが婚礼をあげる。（雑事日記・実紀）

●十二月三十日、有隣軒（うりんけん）鷹司輔信の屋敷より出火したため、御機嫌伺いとして仙洞御所や公家衆へ見舞いの使者を派遣する。（雑事日記）

元文元年（一七三六）丙辰　五十歳　従一位／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今伝授相伝

●一月一日、関白家拝礼・院拝礼と小朝拝参加のため参内・参院する。（続史）

●一月十五日、左少弁裏松祐光より和歌入門の願い出があり、許可する。この時祐光は二十歳。（雑事日記）

●一月十六日、左少弁裏松祐光より、和歌門弟に加えられた祝儀として肴一折を贈られる。（雑事日記）

●一月二十三日、丹波国氷上郡佐治庄にある瑞岩山高源寺住持の相洲が、紫衣勅許の御礼言上のため来邸する。書院で対面し、昆布を贈る。相洲よりは台付きの香炉と金千疋を贈られた。（雑事日記）

●一月二十五日、京都所司代の丹後守土岐頼稔が上使として来邸し、知君と右衛門督田安宗武との結婚の祝儀を持参する。知君より巻物十・三種二荷を、宗武より真太刀（銘信国）・銀五十枚・綿五十把・三種二荷をそれぞれ贈られる。その他、内前をはじめとする近衛家の人々・諸大夫・六位侍・近習・青侍・女中に至るまで祝儀が贈られた。（雑事日記）

●一月二十八日、近衛家における和歌会始を催す。題「竹契遐年」。奉行は少納言平松時行がつとめた。（続史）

●二月十九日、内大臣花山院常雅が内大臣就任（この年一月二十三日）の御礼言上のため来邸し、対面する。（雑事日記）

●三月十日、内前の疱瘡治癒祝いとして、生肴一種を家凞へ贈る。家凞より肴一種と、内々に「三帝宸翰御懸物」一幅を贈られた。（雑事日記）

●四月六日、娘の峯君が疱瘡により没、享年八。法号は恵光院明海玄珠童女。翌七日に西王寺へ葬られた。（雑事日記・系譜）

●五月二十五日、中御門院が『伊勢物語』伝授を前権大納言武者小路実陰より相伝する。（続史）

●七月十二日、中元の祝儀として、桜町天皇へ打曇料紙短冊八百枚と干鯛一箱を献上する。（雑事日記）

●八月一日、八朔の祝儀として、家凞へ小高檀紙十帖と墨を贈る。（雑事日記）

●八月七日以前、家凞が体調を崩す。暮れ過ぎに医師の三輪

了詮と対面し、容体を聞く。（雑事日記）
●八月十四日、医師の三輪了詮が来邸する。即刻御座の間で対面し、家凞の容体を聞く。（雑事日記）
●八月二十七日、関白・氏長者・随身・兵仗などを辞する。
　同日、内覧のみ元の如しの宣旨を受ける。（家譜・続史）
●八月二十八日、巳刻、内覧宣下の御礼言上のため板輿に乗って参院・参内する。装束は衣冠に白紋菱の単衣を着した。また、この時に和歌を二首詠む。「辞職、内覧如旧宣旨蒙りぬる喜びにたへず／年を経てあづかりし代のまつりごと　譲る今日より身をやすくせん／みことのり再びうけて見馴れつる　文には今も心離れず」。
　なお、この時の出仕始などは、南北朝時代の後深心院近衛道嗣の先例に基づくこととなった。（雑事日記）
●九月四日、昼夜を問わず家凞の治療にあたる医師の山科宗安・三輪了詮・生駒玄竹へ、肴一折をそれぞれに贈る。（雑事日記）
●九月十三日、医師の三輪了詮が来邸し、家凞の治療担当辞退を願い出る。了詮はその後も治療に当たっているので、辞退を許さなかったらしい。（雑事日記）
●九月二十五日、弘前藩主の出羽守津軽信著（のぶあき）より、合力金として年間の半分の七十五両を贈られる。（雑事日記）
●九月二十六日、医師の三輪了詮と山科宗安と対面し、家凞の容体を聞く。申刻になって河原御殿へ出掛け、亥刻に帰宅した。（雑事日記）
●九月二十七日、巳刻、河原御殿へ出掛け、申刻に帰宅する。家凞の容体を天英院へ知らせるため飛脚を派遣することを決める。また、酉刻に河原御殿へ出掛け、そのまま宿泊した。（雑事日記）
●九月二十八日、辰刻、河原御殿より帰宅する。その後巳刻に参内・参院して、未刻に帰宅。即刻河原御殿へ出掛け、そのまま宿泊した。（雑事日記）
●十月一日、九月二十九日より帰宅することなく、この日も河原御殿に宿泊する。（雑事日記）
●十月三日、未刻、家凞が「陰虚火動症」により薨去、享年七十。（続史）
　以後、命日の三日に合わせた大徳寺への墓参を自身の薨去まで続けた。（雑事日記）
●十月四日、午刻、河原御殿より帰宅する。申刻過ぎ、再び河原御殿へ出掛けた。（雑事日記）
●十月九日、京都所司代の丹後守土岐頼稔より、見舞いとして大和柿を贈られる。（雑事日記）
●十月十五日、徳川吉宗とその子家重より、家凞薨去を悔やむ書状を贈られる。（雑事日記）
●十二月二十一日、権左中弁広橋兼胤が来邸し、内前が権大納言に任ぜられたことを伝えられる。（雑事日記）
●十二月二十六日、西王寺へ家凞の百ヶ日法要を行うよう命ずる。（雑事日記）

元文二年（一七三七）丁巳　五十一歳　従一位／連歌天仁遠波・和歌天仁遠波・三部抄・『伊勢物語』・『源氏物語』・古今

伝授相伝

●一月九日、京都所司代の丹後守土岐頼稔が年始御礼のため来邸し、小書院で対面する。「如例」とあるので、所司代の年始挨拶は恒例であったことが知られる。この日の床の間のしつらいは、享保十年の禁中和歌御会始に詠まれた中御門天皇宸翰和歌懐紙「禁中佳趣」、唐紅の卓、青磁の三つ足香炉。（雑事日記）

●一月十七日、桜町天皇より、この月十九日までに三部抄の外題を揮毫するよう依頼があり、了承する。（雑事日記）

●二月三日、『大唐六典』校合の御用をつとめていた儒者の堀南湖・松下見櫟と対面する。（雑事日記・繰出）

●三月二十日、長崎惣年寄の薬師寺久左衛門が関東よりの帰途に上洛し来邸する。大書院で対面し、続いて溜之間で菓子・酒・吸物を振る舞う。綿五把と、内々に公卿による寄合書きの色紙と薫物一種を贈った。（雑事日記）

●三月二十七日、猿が今出川の近衛邸・仙洞御所・関白二條吉忠邸などに出没する。（続史）

これに関し、次の逸話が伝わる。「元文二年の春なりしが、いづくより来たりけむ、いと大きなる猿出で来て、仙洞・二條殿・近衛殿はじめ所々徘徊しけり。この年、中御門院登霞ましく、前関白吉忠公、准后前関白家久公など薨ぜられぬ。中当家筋第南の隣、櫛笥家へ来たり。木の上にゐけるを、故殿光綱の卿も御覧ぜしよし仰せられき。主なりける一位隆成卿も、その年うせられぬ。をよそこの猿、来たれる家〳〵主人多く事あり。不思議なりける事とぞ」（柳原紀光『閑窓自語』上巻第七十八話「猿来洛中事」）

●五月四日、前権中納言持明院基雄が清書した四門の額を検分する。額はこの年四月十一日に崩御した中御門院の葬儀に使用した。（雑事日記）

●七月十一日、鹿児島藩京屋敷留守居役が来邸し、合力金として二百五十両を贈られる。（雑事日記）

●八月七日、弘前藩家老の今井源右衛門より書状が到来する。藩の「勝手向不如意」により、合力金の遅滞を詫びる内容であった。（雑事日記）

●八月十五日以前、体調を崩す。一旦は快方に向かったが、子刻に容体が急変し重態に陥る。この報は家礼の権大納言徳大寺実憲・前権大納言櫛笥隆成・権中納言難波宗建・滋野井入道良覚らに通報され、これらの人々は直ちに参集した。（雑事日記・繰出）

●八月十六日、病状御尋のため、桜町天皇より勅使として侍従八條隆周（たかよし）が派遣される。内前が「御幼少」（当時十歳）だったため、滋野井入道良覚と前参議町尻兼重とが相談し、徳大寺実憲が対応にあたることに決定する。

同日、准三宮の宣下を受ける。勅書を中務大輔豊岡光全（みつたけ）が持参し、諸大夫の日向守中川長喬が受け取った。直ちに家久へ披露されるも、既に「カタバカリ」だった。（雑事日記）

同日、内覧を辞する。（家譜）

●八月十七日、未刻、薨去（『続史愚抄』では辰刻とする）。享年五十一。但し西王寺蔵『西王寺過去帳』によれば、実際には既に十五日に薨去していたとする。（雑事日記・繰出・

家譜・続史・西王寺蔵『近衛家墓所見取図』）

●八月十八日、夜、桜町天皇へ家久の薨去が奏上される。この日より三日間、廃朝。（続史）

●八月十九日、大徳寺芳春院の僧侶が来邸し、家久の法号についての相談が行われる。（雑事日記）

●八月二十一日、大徳寺より家久の法要料の相談を記す書付が到来する。家熙の葬儀の際は新銀二百枚に古金三十両であったことに準じ、家久の葬儀にも新銀二百枚と古金を改め新金三十両とすることに決定する。（雑事日記）

●八月二十二日、大徳寺より家久の道号について勘申がある。公家衆が相談の上、最終的に内前と三時知恩寺門跡尊融尼との意向を確認し、「静山大寂」に決定する。法号は「如是観院静山大寂禅定殿下」（『雑事日記』明和三年八月五日条所収『西大寺光明会過去帳』による）。（雑事日記）

同日、江戸より家久病気見舞いの使者が派遣される。（実紀）

●八月二十三日、家久附女房で近衛家大年寄の小弁と陸奥が、家久の薨去に伴い薙髪願を提出する。（繰出）

●八月二十五日、家久薨去につき、徳川吉宗より若年寄の隠岐守西尾忠尚を介して、天英院へ香銀二十枚が贈られる。（実紀）

●九月五日、亥刻、出棺。大徳寺で葬儀が行われる。棺を舁いた人数は十八名。法蔵寺・西王寺・智恵光院より僧侶が参列した。諸大夫・六位侍・近習・青侍・坊主に至るまで、近衛邸の留守を預かる者以外は総出で葬送に参列した。引導を渡したのは、大徳寺第三百二十四世の璋隠宗瑾。（雑事日記）

『看聞秘鈔』巻四所収『厳舎雑録』によれば、薨去後、下御霊社に相殿神「国八百足命」として祀られた（他に天中柱神＝霊元天皇、天成懿別皇神＝桜町天皇、美玉凝媛命＝御匣殿）。

●九月十六日、家久附女房の小弁と陸奥がそれぞれ薙髪する。戒師は法蔵寺住持で黄檗僧の百拙元養がつとめた。小弁は桂厳院、陸奥は真凉院とそれぞれ院号を名乗る。（雑事日記・繰出）

●十月二日、平松入道夕可の勧進により、公家衆寄合書きによる家久追善の『法華経』が完成する。筆者は、第一品＝三位交野惟粛、第二品＝右中将園池房季、第三品＝図書頭錦小路尚秀、第四品＝蔵人頭広橋兼胤、第五品＝少納言長谷範昌、第六品＝左中将西大路隆廉、第七品＝侍従石井行忠、第八品＝侍従裏辻公風、第九品＝権中納言万里小路稙房、第十品＝中務大輔豊岡光全、第十一品＝左少弁裏松祐光、第十二品＝侍従勘解由小路音資、第十三品＝参議阿野実惟、第十四品＝右中将町尻兼久、第十五品＝右兵衛佐船橋親賢、第十六品＝前参議外山光和、第十七品＝侍従日野西豊尚、第十八品＝左中将七條信全、第十九品＝左兵衛佐北小路光香、第二十品＝民部大丞小森頼亮、第二十一品＝侍従八條隆周、第二十二品＝権中納言難波宗建、第二十三品＝弾正少弼山井氏栄、第二十四品＝右兵衛督西洞院範篤、第二十五品＝少納言平松時行、第二十六品＝大学助北小路俊包、第二十七品＝中務大丞慈光寺澄仲、第二十八品＝平松入道夕可。また、平松時行

が自筆で釈迦三尊像を描いた掛物一幅も霊前に供えた。これは、家久の遠祖六條摂政近衛基実が薨去した時に時行の遠祖西洞院信範が行った先例に倣ったのだという。（雑事日記）

●十月十日、家久の葬送に供奉した鹿児島藩・仙台藩・津軽藩の京屋敷留守居役に五百疋ずつ、その下役には三百疋ずつ、さらに鹿児島藩士で大徳寺内を警固した三人に二百疋ずつを贈る。（雑事日記）

●十二月十九日、三時知恩寺門跡家司の内藤監物らが、家久の猶子栄宮（五歳。実父は閑院宮弾正尹直仁親王）を尊融尼の附弟とすることを朝廷へ願い出る。尊融尼は十八日に重態となり、この日示寂したが、公には二十日示寂とされた。（雑事日記）

元文三年（一七三八）戊午　薨後一年

●三月二十八日、天英院が家凞と家久の菩提を弔うために、京の本満寺へ『法華経』一部を奉納する。（秘鈔）

元文四年（一七三九）己未　薨後二年

●三月三十日、堀川御殿において息子の寛君が没、享年八。法号は玉麟院英室了悟童子。西王寺に葬られる。（西王寺蔵『西王寺過去帳』・『近衛家墓所見取図』）

●十二月九日、尾張藩家老の成瀬隼人正と竹腰志摩守より近衛家へ書状が届き、天英院の意向により、娘の好君（たか）と尾張藩主の参議徳川宗勝の次男熊五郎との縁組が内定した旨を伝えられる。（雑事日記）

元文五年（一七四〇）庚申　薨後三年

●六月四日、連歌師の猪苗代兼恵が来邸し、難波邸において前権大納言久世通夏より古今伝授を相伝した旨を告げる。本来は基凞や家久から相伝される約束だったが、相次いで薨去したため、代わりに前右大臣中院通躬より相伝されることになったが、通躬もまた元文四年十二月三日に薨去し、伝授が中断した状態であった。（雑事日記）

寛保元年（一七四一）辛酉　薨後四年

●六月三日、内前が大徳寺芳春院の役者僧を招き、天英院（この年二月二十八日に薨去）の遺物として常子内親王筆の『法華経』八巻と台子を、また、基凞・常子内親王・家凞・天英院、そして家久の永代茶湯料（読経料）として百両をそれぞれ寄進する。（雑事日記）

●九月十三日、吉田山新長谷寺が開帳する。この時、基凞・常子内親王・家凞、そして家久の「御筆物」が「諸人」へ展観された。（雑事日記）

寛保二年（一七四二）壬戌　薨後五年

●八月十四日、猶子の大僧正玄如光乗（東本願寺法嗣）が示寂、享年二十一。法号は入定聚院。（雑事日記・秘鈔）

寛保三年（一七四三）癸亥　薨後六年

●六月二十八日、もと家久附女房の真凉院と桂厳院がそれぞれ上臈格となる。さらに真凉院へは二十石が与えられた。

（雑事日記）

延享四年（一七四七）丁卯　甍後十年

●一月二十二日、娘の好君と尾張藩世子の左中将徳川宗睦（むねちか）（熊五郎）との縁組が発表される。（雑事日記）

寛延二年（一七四九）己巳　甍後十二年

●七月二十四日、家久の十三回忌にあたり、上皇の桜町院より追悼の和歌御会を催すことが打診される。出題は右衛門督冷泉為村で、題「述懐」。（雑事日記）

●七月二十六日、桜町院主催による家久十三回忌追悼和歌御会の開催が決定する。（繰出）

●八月十六日、家久の十三回忌法要が行われる。（雑事日記）

●八月十七日、家久の十三回忌追悼和歌が大徳寺へ奉納される。（雑事日記）

寛延三年（一七五〇）庚午　甍後十三年

●六月二十三日、連歌師の猪苗代兼恵が没。

家久は生前、兼恵宅での連歌会に参加した際、嵯峨より打枝につけた小鳥を献上された。家久はこれを人々に詠むように求めたが、「皆々一きは詠まんと傾き案じ」たが「はか〴〵敷」詠むことができなかった。しかしたまたま居合わせた旅僧が「今こゝに嵯峨野の秋を見るばかり　かりのゑもの、小鳥めづらし」と即詠し、家久は「秀逸なり」と称賛したという。（秘鈔）

宝暦四年（一七五四）甲戌　甍後十七年

●五月十五日、もと家久附女房の真凉院へ、内前の長女の姫君が内々に引き取られる。姫君はこの年四月二十五日に内前の上臈おいま（前権大納言高倉永房の娘）が出産したが、この日、産後の肥立ちが悪くおいまが亡くなったための措置（号は霊光院）。（雑事日記・系譜）

宝暦五年（一七五五）乙亥　甍後十八年

●九月二十八日、もと家久附女房の真凉院の五十賀が催される。綿十把・肴・樽代千疋・「百首詩歌」・「絵巻物」などが内前から贈られた。（雑事日記・繰出）

宝暦九年（一七五九）己卯　甍後二十二年

●九月二日、もと家久附女房の真凉院が伊勢参宮に出発する。（繰出）

●九月十三日、もと家久附女房の真凉院が伊勢参宮を終え帰京する。蹴上までの迎えには侍の東市佑中原重威（のちの諸大夫佐竹重威）が出掛けた。（雑事日記・繰出）

宝暦十一年（一七六一）辛巳　甍後二十四年

●八月十六日、家久の二十五回忌の法要が、大徳寺と西王寺の二ヶ寺で行われる。（雑事日記）

宝暦十二年（一七六二）壬午　甍後二十五年

●四月十六日、もと家久附女房の真凉院が摂津国中山寺の開

帳へ参詣する。（繰出）

宝暦十三年（一七六三）癸未　甍後二十六年

●二月十二日、もと家久附女房の桂厳院の病気看護のため、片岡頼母が近衛邸に参上する。（雑事日記）

●三月二日、寅刻、もと家久附女房の桂厳院（小弁）が没、享年六十一（前年耳順を迎えたことに基づく）。西王寺に葬られる。（雑事日記・繰出・西王寺蔵『西王寺過去帳』）

●十二月十四日、内前の長男篤君（宝暦八年二月四日誕生。母は勧修寺門跡坊官の朝井治部卿の娘おてよ）が着袴の儀を迎えるにあたり、大徳寺の家久の霊前へ香と金百疋が備えられる（他に基凞・家凞・内前正室の徳川勝子〈尾張宗勝の娘〉へも備えられた）。使者は諸大夫の若狭守齋藤叙昌がつとめた。（雑事日記）

明和二年（一七六五）乙酉　甍後二十八年

●三月二十八日、もと家久附女房の真凉院の六十賀が催される。諸方へ出詠を依頼していた祝儀の詩歌などが贈られた。（雑事日記・繰出）

●十月十三日、内前が有栖川宮中務卿職仁親王より和歌天仁遠波伝授を相伝する。（雑事日記）

●十月十七日、内前が和歌天仁遠波伝授を相伝したことを基凞と家久に報告するため、大徳寺に諸大夫の出羽守今大路孝廉を代参させる。（雑事日記）

明和三年（一七六六）丙戌　甍後二十九年

●十一月二十九日、内前の次男栄君（宝暦十一年二月二十二日誕生。母は家女房おひで）が着袴の儀を恙なく終えたため、大徳寺の家久の霊前へ金百疋が備えられる（他に基凞・家凞・徳川勝子などへも備えられた）。使者は諸大夫の石見守佐竹重威がつとめた。（雑事日記）

明和四年（一七六七）丁亥　甍後三十年

●二月二十一日、内前が有栖川宮中務卿職仁親王より三部抄を相伝したことを基凞と家久の霊前に報告するため、大徳寺に諸大夫の石見守佐竹重威を代参させる。（雑事日記）

明和五年（一七六八）戊子　甍後三十一年

●四月二十三日、もと家久附女房の真凉院が大和国法隆寺へ参詣のため、京を出立する。（繰出）

明和六年（一七六九）己丑　甍後三十二年

●七月二十三日、この年八月十七日に家久の三十三回忌を迎えるにあたり、追悼和歌会を催すことに決まる。出詠が依頼されたのは、右大臣鷹司輔平・有栖川宮中務卿職仁親王・権大納言広橋兼胤・同広幡輔忠・前権大納言万里小路政房・権中納言久我信通・同日野資枝・同櫛笥隆望・前権中納言平松時行・同園池房季・同石井行忠・前参議山本実覩・三位持明院宗時・大蔵卿交野時永・蔵人頭柳原紀光・左中将三條実起・同滋野井実古・右少将中院通古・左少将石山基陳・左馬

権頭慈光寺澄仲・右馬頭桜井供敦・中務少輔錦小路頼尚・侍従東坊城益良・同葉室頼熙・連歌師の法橋猪苗代兼誼。なお、内前は出題を右兵衛督冷泉為泰に内々に依頼し、為泰は「対月憶昔」を提示した。追悼和歌会の奉行は左少将七條隆房がつとめた。（雑事日記・繰出）

●八月十七日、家久の三十三回忌の法要が行われる。（雑事日記）

明和七年（一七七〇）庚寅　薨後三十三年

●九月十七日、家久の孫師久（内前の嫡子。のち経熙と改名）が東宮大夫拝賀を無事に済ませたため、大徳寺の家久と基熙の霊前に金百疋ずつを供える。使者は諸大夫の刑部少輔進藤長興がつとめた。（雑事日記）

●十二月三日、後桜町天皇の譲位と英仁親王（後桃園天皇）の践祚（この年十一月二十四日）の一連の儀式が滞りなく済んだため、内前が大徳寺の家久と基熙・家熙の霊前へ金百疋ずつを備える。また東宮大夫として初めて務めを果たせたため、師久が家久の霊前へ供え物（金百疋か）をする。（雑事日記）

明和八年（一七七一）辛卯　薨後三十四年

●十二月三日、内前が太政大臣に還任（この年十一月十五日）したことの礼として、大徳寺の家久の霊前へ金三百疋、西王寺の家久の霊前へ金二百疋をそれぞれ供える。他に西王寺の基熙と家熙の霊前にも金二百疋を供えた。使者は諸大夫の石見守佐竹重威がつとめた。（雑事日記）

安永二年（一七七三）癸巳　薨後三十六年

●閏三月二十日、もと家久附女房の真凉院が体調を崩す。（雑事日記）

●閏三月二十七日、真凉院が危篤のため柳図子の進藤家の屋敷へ移りそのまま没、享年六十八。法号は真凉院秀栄浄知大姉。この屋敷は真凉院が借り上げ、実弟で京極宮家諸大夫の下野守高木重興が守護していた。（雑事日記・繰出・系譜・西王寺蔵『近衛家墓所見取図』）

●四月二十八日、真凉院の逝去が披露され、この日戌刻に西王寺へ葬られる。（雑事日記・繰出）

●五月十八日、真凉院の仏壇に祀られていた家久の位牌、光寿院（家久の長女長君）・凉松院（満君出生の延君）・幼光院（家久の長男。俗名不詳）の合同位牌、玉麟院（家久の末子寛君）の位牌三枚が西光院（上京区仁和寺街道御前東入ル。浄土宗で基熙が堂舎を建立した）へ移される。使者は近習の木村隼人治員がつとめた。（雑事日記）

安永三年（一七七四）甲午　薨後三十七年

●五月十七日、内前がこの月十四日に後桜町院より古今伝授を相伝したことの礼として、大徳寺の家久と基熙の霊前に金百疋ずつを供える。使者は諸大夫の石見守佐竹重威がつとめた。（雑事日記）

安永七年（一七七八）戊戌　薨後四十一年

●八月二十八日、娘で尾張藩主の権中納言徳川宗睦の簾中となっていた好君が没。法号は転凌院。西王寺に葬られる。（系譜・西王寺蔵『近衛家墓所見取図』）

天明五年（一七八五）乙巳　薨後四十八年

●三月二十日、嫡子の内前が薨去、享年五十八。法号は大解脱院鳳悟黄中禅定殿下。大徳寺と西王寺に葬られる。（系譜・西王寺蔵『西王寺過去帳』）

天明六年（一七八六）丙午　薨後四十九年

●一月十二日、娘で権中納言田安宗武の簾中となっていた通姫（知君・森姫）が没、享年六十六。法号は宝蓮院惺池覚楼大姉。（系譜・西王寺蔵『西王寺過去帳』）

●一月十三日、御三家が通姫の弔意の使者を将軍徳川家治に派遣する。（実紀）

●一月十四日、徳川家治が尾張藩世子の左中将徳川治行（宗睦の養子）のもとへ、弔慰の使者を送る。治行の養母にあたる好君は通姫と姉妹にあたるため。使者は小姓組番頭の肥後守藤堂良峯がつとめた。（実紀）

●八月十六日、大徳寺と西王寺で、家久の五十回忌法要が行われる。（『経凞公記』）

享和元年（一八〇一）辛酉　薨後六十四年

●九月二十六日、猶子で三時知恩寺第十二世門跡の尊信尼が示寂、享年六十九。法号は瓊林院宝誉尊信盛光大禅定法尼。実父は閑院宮弾正尹直仁親王で、幼名は栄宮。（雑事日記・秘鈔）

天保七年（一八三六）丙申　薨後九十九年

●八月五日、家久の百回忌にあたり、追悼和歌の出詠が依頼される。出題は民部卿冷泉為則。（有栖川宮董子女王『円台院殿御日記』）

●八月十六・十七日、大徳寺で家久の百回忌法要が行われる。（有栖川宮董子女王『円台院殿御日記』）

（みどりかわ・あきのり）